拾遺都名所圖會

左青龍

二

和書門 類
八六五九 號
二二三 函
二一 架
二一 冊

内閣文庫
和
八六五九
一

内閣文庫
番號	和	8659
冊數	11（ 8 ）	
函號	172	176

綴じ部（喉部分）の文字など開きが不鮮明な箇所あり

国立公文書館
National Archives of Japan

拾遺都名所圖會巻之二目録

左青龍首

祇園削掛神事
祇園香煎
螢嶋
泰山府君
祇園女御
崇徳馬場 宮辻
山之井
嫗堂
地蔵院
九重丹楓
日親廟塔

同神事
二軒茶屋 合餅 淨水 河原院 松風
直葛原 長楽寺碑銘
捨山王
鷲尾
桂橋寺
藻蟲菴旧趾
大日堂
清水隨求堂 獅子石 要石
秋葉社 覚明水
通妙寺 妙見社

千丈杉
知恩院 補遺
歌仙堂 名墓碑 大雅堂
疫伏社
雲居寺旧跡
霊山寺
鼠堂屋敷
仲光院
尾振谷
六條院陵
良経公碑

神輿洗
太子水
芭蕉堂 南無庵 芭蕉翁碑
蓮華院旧蹟
高臺寺 補遺 萩花 天満宮
擧白堂旧蹟
經書堂
寶徳寺
南蔵院
延年寺辻子
法國寺

袋中菴
阿佛家
城東寺
専定寺
泉涌寺 清頭
落柿
万壽寺
海蔵院
法性寺旧蹟 同観音
晴明墓
極樂寺
勧修寺 十五勝
大石屋鋪

赤築地
西福寺
平教盛家
智積院
雲龍院 来迎院 観音寺
善能寺 戒光寺 安樂光院 新善光寺 悲田院
瀧尾祠
俊成卿墓
月輪
羅刹谷
獨鈷水
稲荷山初午詣
山階八幡宮
田村将軍墳

安祥院
焔魔堂
上行寺
新日吉社
五条辻
自然居士墳
光明峯 光明峯古跡
薬師堂
毘沙門堂
小栗栖法華擅林
三條右大臣墳
野色山

西光寺
六道迎接
牢岸
剱宮
常盤前宅地
三聖寺
西寺古跡
地蔵堂
遣迎院
田中社
明智光秀亡蹟
西之山巌屋社
小野随心院

萱尾社
北小栗栖大神
牛尾音羽山
白石明神社
白河寺
梅本寺
栗山寺
四宮河原
業平谷
阿弥陀堂

腹帯地蔵
大宅巌屋社 大宅寺
布引瀧
白石菴
三宮社
花山阿弥陀堂
神無森
諸薬山
奴茶屋

内裏芝
興福寺古跡 摂金屑石藍勝
蛇ヶ淵
蓮如上人墳
花山稲荷祠
元慶寺
鵜坂
十禅寺
地蔵寺

外山
妙見社
法巌寺
實如上人墳
大石断食石
僧正遍昭墳
蝉丸塔
人康親王旧趾
護國寺

名どころを
志れを都に
案内者や
圖会を
ちらとも
そふ
うつし画
湘夕

元朝寅刻
祇園削掛
ぬる年の垢はさらりと流さんか削かけらる都の注連縄
石の門

祇園御神詠　洛東祇園午頭天王の御神詠なりとて此御哥より近年桜樹を奉献して社頭に植ゆる事多し

玉葉　祇宿に千とせの桜花さかへん人の身をもまもらん

これハ祇園乃御おしへにて人の髪にさへへるとなん

みし備の梅　紅梅の名なり　当社神楽所のまへにあり

みしはと毎木もふ神人梅乃花　宗祇

今昔物語に祇園ハもと山階寺の末寺なりけるに有る時祇園乃東に比叡山乃末寺蓮華院といふ寺ありけるに祇園の別当良算といふ者ありけりその蓮華院の堂乃前に微妙の紅葉乃ありけるを折らんとしけるを蓮華院の僧これを制して曰別当ハそれ天台末寺の内なる木をきるべからずと良算大に嗔て使をもて折らせけれバ良算のもとへ来りて案内をせしに従者ハ其木を伐てけり良算いよいよ嗔て蓮華院乃法師を悟く横川の慈恵僧正天台の座主として殿下の御修法に法性寺に参りけるに良算を召さるれど良算放言して来らざりけれバ座主大に嗔りたまひて祇園乃神人等を一統に延暦寺に附けべき寄文を書て比叡山に判を加へよと責られけれバ座主に門の所司ハ呼下して祇園乃神人等をして良算を追放すべきよし加へられ断して後祇園ハ天台山の末寺と早く別当良算を追放して座主より良算ハ逃れにけりとて武将を調て防ぐ座主より猶を諸軍を調て攻めければ彌嗔て西塔の平南房に住たる暦荷といふ名高き者と二人に祇園に差して良算を追しむ良算はかなはずして逃にけり是より真暦荷を別当にして執行せしめたるとぞ都ハ是より祇園精舎の春乃曙

祇園社百首　あふ坂の杉より杉にかくろへて　信成

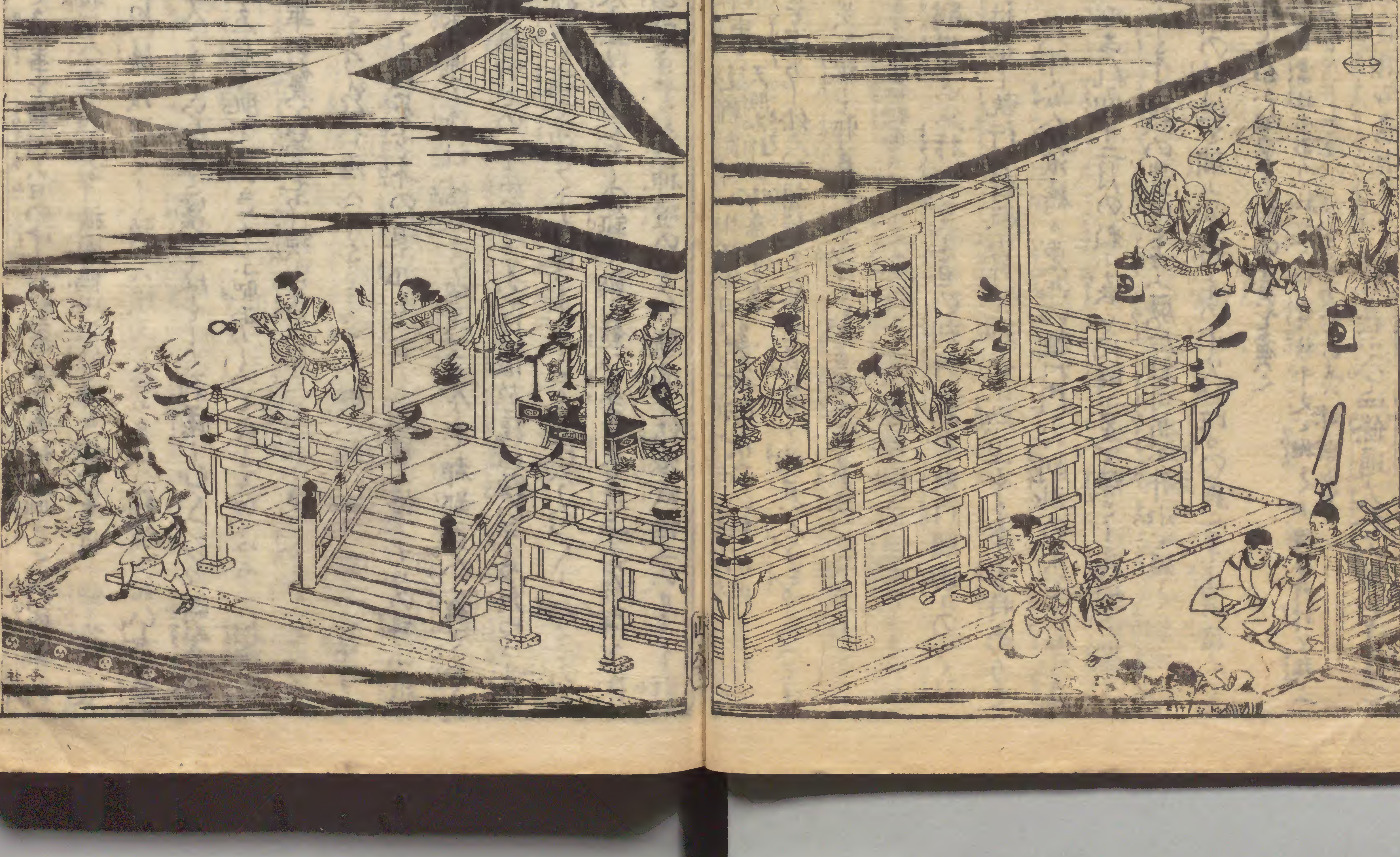
祇園削掛神事　元朝寅刻之社説に曰毎歳除夜子の刻の頃より社家の諸人雑言を悪口し他人を誹謗して假令其声を聞其人を知るとも是を争ひ是を恨むと邪義の抜ふして勧善懲悪の意なくんバ其雑言に勝る方ハ来年乃吉兆なりとし又参詣下向の道條にても放言する事世俗謬て是を削掛といふハ非也神事ハ元旦の刻計に社務執行腰輿にのりて社司前駆して社参し執行ハ拝殿に昇て神前に黙坐する事少時ありて経呪を誦し天下安全を祈祷す東西の欄の内にハ削掛の木を左右に建並ぶおのおの六也これ即十二月のかたちに表す同時に火を燧て其烟の靡く向ふ方を見て今年五穀の豊凶を占ふ厥后社司新に井水を汲て削掛乃火をもて元朝の神供を調ふ是新年の水火を改るの義なり参詣の諸人も亦其火を携て家に帰りて元朝の羹を煮る

千文札　正月廿四日当社にあり社説に曰寶銭千文を抛て小縄に神札を掛く此所謂なりしそ世に誓文といひて偽言にや

神輿洗　五月晦日六月十八日にあり当社の神輿を洗ひ清むるの謂なり此日夜に入て四條通大和大路の辺より

祇園社削掛の神事ハ例年元朝寅の刻より社務執行宝寿院西殿に於て法施修行其四方に削掛の木八所にかけて法楽終てまたこれに火を移し四方へ配し又の水を灑んく是ハ陰陽和順の表なりしとかやかの削掛の火を参詣の人々火縄にうつし家に携へ帰りて元朝雑煮の焼火とは是なん其

年の疫を競て為すりとぞ



まで舁出して祭事を執行ふ日の中ふハ壮麗なる葛衫を揃えて御迎挑灯
の数く踟物ハ大路ふ烈をなし祇園鴨川の妓婦女伶の輩ハ辟言花ふ集
てえならぬ風流を任くし頭ふハ珠玉を鏤め身ふハ錦繍を絡ひ女ハ髪
のおそろしんへそそいひしと露をしぬぞして剃落しむくつけれ断髪甲頭
と変じあるハ色白く肌ふよのきよらかふ肥あつくるを好らかの相撲取
好まひして翠の髪を髪貫ハ毛ふし額ふハ角をとそえ花前ふうち女もつれんた
嬉し顔ふ出立そうろうしたるハ座ん〳〵しふきとまさ雲の鬢ふ粧ひ女御更衣の艶なる
姿を摸し二八ふうちうる少年の道ふ契ふ百よ七の姥ふ優して日の斜ふ祇
園の花街を東へ通て御社へ踟入るさる足をつれんとぞ都鄙の人〻群よう
うつくまての来掛りの假店簾を垂て浮浪放蕩の輩ひざをつれてたり
祇園林ふハ桟敷を構て所せくまで連てありめしも世俗今やくくとねとろふ
前雑子の琴三弦皷をやしの鉦太鼓ふ競ひ集て炎暑を忘る群をなし
大路ハ人の山ふて日暮まハ神燈のかゝけ騈闐く絹張紙細工の基をり灯

を輝し雛物のおもみふ時とうつゝされバ洛東の賑ひ此日ふ勝るハあらされ
皆神の徳ふて顯も治國平天下の御時ふ値て萬歳を謳ふ慶の聲あるべし

祇園香煎ハ祇園の名産ふして世ふ名高し西門の街ふ製する家四五軒あり
竹器ふ入られ售る又下河原の茶店ふハ香煎を立てつるふ出され

二軒茶屋 社頭の南大花表の内ふありしへハ茶店ふ鑵子とうけ湯を供し香煎を立て社参の人の休息所とし且豎觴ハ年暦久遠ふして
詳ふえまうらし今より百八十餘年前慶長の比東方ふし建ちく東西兩翼の如く
これを二軒茶屋とハいふむうしの例今ふありて元朝ふハ祇園の社中ふて本尊
て王服を供す初めの鑵子西方の家ふ傳へて秘蔵し次それとそうるふ古代乃絶みて
胴ふ紅葉唐松の模様あり名を紅葉釜としふいく毎歳六月朔日ふハ氷餅奈
串ふさうて豆腐ふ合せ味噌引とし之れを合餅とし氷餅ふ準し物あるもうん
祇園會鉾乃兒具外氏諸の人〻ふもうれしと出たる又六月六日ふも神樂所ふ於て
祭儀乃役人ふ之れを出して茶例と次異加茂社御手洗團子の類ひふ依るへし
此茶店今ハ以ゐへふ変つてそつ○ふ菽腐を煎る田樂の形もし此一振を出して
酒飯を售る此所の風俗うつりて魚肉を賈ふ事を禁ぜられハむうし比へ
山門の末院ふして佛讀乃かうりゆへあるら今も山門の阿闍梨一夏中
洛東の祇社巡拜し時西方の茶店ふ憩たまひ日毎ふ齋食あるハ之れ
むうしの遺風なるらん又阿蘭陀人洛東通行の時東方の茶店ふやすらひ
食るも流例ふうり
しゝをそ見え

月をとて花ハ蒼くうり二軒茶屋　李吟

浮水 二軒茶屋の名産ハ大櫻の実を梅酢ふ漬るをいて是酒毒をけし食滞を治をとうん来客憩ふよんそられを進む

祇園 二軒茶屋

阿蘭陀ヵ細工ふ
我國の
祇園豆腐の
やとゝうかゝ
蕎

知恩院本堂 昔ハ大御影堂と称ス東西廿二間又ハ南北十七間三尺又寸瓦葺南面 勅額大谷寺と書して 後奈良帝の震翰なり

本尊圓光大師影像 大師の御自作なり居數ふ御修補の時の記あり其中ふ根本御自作同四十八日御開帳供養の霊像なるの文字 又真影の左右ふ圖さる所二天童子 弥陀三尊 煉檀中央ふ安んじ恵心僧都乃上足覚阿供奉の作なりしく 賀茂大明神 毘沙門天なり 圓光大師御作暁絵 釈迦像 堂後ふ圖を絵所 善導大師像 長二尺弐寸是則自作の像之 の持尊なり 法橋澄輿の筆之

神變不思議佛舎利 堂内ふ安置れ神変の名義ハ義山上人舎利の記ふ委しへてる 舎利塔ハ黄金ふして唐物なり

○大方丈 南北十三間東西十七間半 佛間 蓮花極彩色の画ハ狩野主馬尚信乃筆なり 阿弥陀尊の立像ハ安置し安阿弥快慶の作之 上段 床画瀑布見李太白 中段 画ハ鉄拐 張果郎 中彩色画工同前 鶴間 金張附松ふ鶴乃画極彩色 狩野尚信の筆なり 拝間 金張附松ふ鶴の極彩色 同し 下段 画ハ劉女西王母 畫工ハ前ふ同し 狩野外記信政乃筆之 裏上段 金張附画ハ梅ふ竹 音呼極彩色ふしてく 梅間 金張附画ハ梅ふ雉松ふ鳩極彩色 画工ハ狩野奥意法橋定信筆なり 菊間 金張付菊の画極彩色 狩野政信の筆なり 鷺間 画工同前 金張付柳ふ鷺の画極彩色 柳間 金張付柳ふ燕の極彩色 法橋定信の筆之

坐禅石 大方丈の庭ふあり昔慈鎮和尚此石上ふ坐禅しられへそと此石初ハ山門の下にあ

○鐘樓 本堂の東南ふあり方四間尾葺 洪鐘 高一丈八寸亘九尺厚九寸又分 延宝六年十二月十五日供養あり 銘六字名號霊巌上人の筆 輪藏 本堂の東ふあり傳大士普建普成を安置れ 藏経ハ福州 寛永年中 開元寺の藏本之此所ハ元和五年ふ草創しるをされと鑄る

○鎮守八幡宮 相殿ハ天照大神 春日 山王 熊野を奉る 満誉僧正の勧請之又愛宕 弁財天 を祀る 衛誉上人の勧請ふて都て七社之宮守の居所を真葛庵といふ

○山門 元和五年の御造建なり寺説ふ曰三解脱門ふ準して三門と書れ 長五尺 脇士ハ善財童子 須達長者 三門ハ空門 無相門 無作門といふ 門上ふ安ずる所ハ宝冠釈迦佛 及び十六羅漢なり

○下乗 石碑藤木甲斐の筆之 徒然艸ふ曰退凡下乗乃卒都婆外なるは下乗 内なるハ退凡なり

○櫻馬場 山門通といふ 舊ハ祇園の神領之 延宝七年代地ありてかくく所之 路傍の櫻ハ江州膳所の城主本多康將これを寄附しるあ

○鉄盤石 山門の下ふあり傳云三條小鍛冶宗近鉄盤ふ鍛ひたるといふなり 或ハ此石いふ し へハ子院靈雲院の外林中ふあり此所ふ及 の水あるふよりて貞享元年十月此所ふうつれ 又の名前縁ふ見えたり

○阿弥陀堂 山門の上ふあり舊ハ東の方上勢至堂の前ふあり宝永七年此地ふ移を 本尊阿弥陀佛坐像ふして春日佛師替文會替主勲ヵ作之 いふしへハ大和國百濟寺ふ安し本尊之正徳二年義山上人傳来して此ふ安置れ 初め安さる所ハ立像五尺運慶の作なり今本堂脇壇ふあり又堂内ふ伽藍神の四天王安置れ多聞持国増長廣目之是又義山上人享保三年ふ寄さる所 なり天蓋の蟠龍の画ハ海北友竹齋の筆なり

○古墳 阿弥陀堂の北ふあり五輪の石塔婆高廿九尺五寸地盤方三尺又寸之れ 何人の為ふ建るといふ年歴知られ 山城名跡志ふ曰上東門院 彰子の陵なるんか又一説ふ曰是今の又條太子堂の開山 相別號ハ 鎌倉極楽寺忍證の墓之 太子堂の開山ふして当寺ふあり 遊此まそかの忌所ふそ 太子 堂より衆僧来って誦経修法をしそ今ハ絶ぬ 無銘のゆへふ或説とぞ疑滞多くあるし

○本堂廻櫻樹 庭の城主永井信濃守大江尚政これを植らる 影向石 法然上人御臨終の時加茂大明神此石上に降臨し給ふ

○元祖御廟 東の山上にあり賜蓮堂とよぶ此名義は法然上人傳記に曰上人往生の後眞年十二月十四日の夜一人の女房の夢に来る老僧其夢に上人の廟堂に参りければ縁々乃蓮華ありかくて一人の老僧花とありていはく此廟は極楽往生の縁に入るべき此地に来り詣ん人に示すべしと宮人婦人掌を合て是を受ると見しぞ夢覚ぬ此所に茲をかへ乃墳墓に移し参らしむ抑景に靈たがはざりけり信心懐くてしばしと世に倣ふに御祥忌を逆て歩を運ぶの貴賤市をなし袖をつらね佛恩を謝すを本とす故に知恩院と云ふはまことにそれより年々御忌をとて法会を執行し給ふ後柏原帝圓光大師の詔を賜つて法則を定め宜く法然上人の御忌をとへしこれ今に至って天楽と號て其式永く違ふる事なし勅拍子にて行導会あるも亦此所に謂あり

○太子堂舊跡 五條下寺町にうつされ塔中光玄院の地は後世 太子松 今所の後にあり

太子水 前にあり 知恩院御門跡殿舎の 地蔵尊 塔中西光院にあり三條に鍛冶宗近持念佛なりしとぞ

○本願寺舊趾 知恩院山門の北桜馬場の地に親鸞聖人の御廟の跡は塔中崇泰院乃後にあり前編にいへる本願寺の記に曰文永九年聖人の息女覚信尼の建立之寺勢あり覚信の息覚恵法師それより代々を経て文明二年二月十六日山徒の為に破却せらるとぞ

○螢堀 知恩院の東山上五町計にあり

名所之名集

東山知恩院とよろこひそ
かすかなる人の宮古を庭のはるかしられ

為政度

真葛原 知恩院山門のまへより南圓山長楽寺のかたへ祇園林までをいふなり

我恋ハ松をしくれのそめかねて真葛か原に風さわくなり　慈鎮

此歌ハ慈鎮和尚坐禅石の上に坐して詠ぜさせ給ふ新古今集に大僧正慈圓とありこれハ先の諱名なるべし芥のさうしハ季吟翁八代集の抄に曰恋人の心を面と松をしり我思ひかけをしられても祇園ハとて詠ハ叶ひ出て紅葉せぬ松をしぐれの染かぬるとて只真葛原にあかぬひけて恨みのうらみつゝとあくうらみの心を恨る詞にてふかき真葛へ心多く一筋ならぬ恨をそひてさわぐといへるなりあはれ恨るこゝろのたとへ切なりといへるなりとぞ

後撰 かまくえて玄の葉もうちはくを原々ふ秋風の恨の松風　西園寺

新拾遺 今ぞしる真葛か原に吹風のうらみも秋にかへるならひは　道智法師

新後拾遺 真葛原露のふかさもおもひしれ恨し中を松風ぞふく　従二位忠兼

右の哥ハ名所にもあらまほしけれども化野はさきの代の名しるき故十代古道のたとへ世のあはれなるハあはれをうくる人も多けれど真葛原は今も名所にしてもよみされ侍へきとしこそ雖しかれの名とはなりにし

東山安養寺詠眺
一しほも夕日に出てめにちかく見る山よりなかれをちたる川ゑ　逍遥院

長楽寺碑銘
東山勝景。大悲霊境。遠臨神州。邇覩鷲嶺。花濃雪香。竹苞月冷。片石維貞。勒銘傳永。
平信好撰
大江資衡書

歌仙堂 又の名ハ大雅堂といふ雙林寺境内門の北にあり 別室に觀世音を安置す金銅佛長ハ五寸五分計なし 堂の名を歌仙
堂といふハちかきころ池野氏大雅といふ風流の人ありてかれが名ハ冷泉家乃
門に入て書畫を善し名ハ無名字ハ貸成といひて大雅堂といへり今ハうせたるを
あまつさへ世のさいはひに殺せられ其門葉其趾を空しくせんもかなしかるべしとて
古へ靈山にて大哉翁長嘯子のすみかゐたまひし歌仙堂の古き柱礎ありしを
かの山の坊なりけるひとにかれを基として今ここに建て樓の上に六哥下に六哥の紀貫之數
て歌仙堂の筆蹟をもとむ於の尾にハかの大雅堂といへる篆印を尾に造りて當
なる之是亦中尾氏といふ人其材石の用を授て建らせ侍しとぞ貸成ハ洛の北
西陣といふ所の生れにて有る中頃ハ二條のほとり樋口の町にすみ聖護院乃邑
に住むまた知恩院の西なる袋町に廬を結び遂に祇園の南葛原居に終る
ところ宿坊の浄光寺に葬る其墓碑ハ大典禅師の書かれしところにて載る

故東山畫隱大雅池君墓 篆額ハ芙蓉が書なり

池貸成歿矣。既葬焉而未有銘也。以為請。余嘗觀貸成為人
蕭散。不以寵辱驚心。善與物和而不苟合。紆志外跡。放而内實
修撿。與人交謙損而不阿。簡於禮法。當往不往。當答不答。而顔
諸義未嘗有所失。患而弗望。廉而弗劌。甚於取予得失。恬淡如
也。平生行事。多出於人之所不意。於是有畸人之目焉。貸成生
平安。幼而穎異。學文學書無不能。而獨長於繪事。圖山水尤妙。
好遊名岳。尤趨健高峻幽奥無不庻極。即取以為毫端趣。數登
富士而每異其路。因作富士圖一百。各變狀態。皆其所經覽古
今画工所未及也。安永丙申四月十三日。病卒于葛原艸堂。距
生享保癸卯五月四日。得年五十有四。葬于舟岡之南浄光寺
先塋之側。貸成名無名。始名勤。遠近皆以大雅堂稱之。妻玉瀾
姓徳山。間靖不飾。能配夫之行。亦能書有名。無子。家絶。悲夫。世
皆知大雅之書畫而不知其行。知其行而不知其心。故為叙其大
略。如其世則存焉。不待論也。銘曰

若人胡不壽。若人胡無嗣
廣安子我淨光之地

安永六季丁酉六月　淡海竺常撰　韓天壽書

むかしふるくハ今のむかしのむかし享保のころ下河原に茶店をいとなみしかぢといふ女あり
いと容顔うるはしく又貌ありて常に粧粉をかざらざれどもゆききの人ハ目を送らざるハなし
ことにそれがおもむき梶の葉といふ人集あり
雪ならバ梢にとめてあるべきを庭のあはれの花ちりしく　梶
此梶乃跡を嗣て又百合といへる女あり夫と共に東武より来て漂流して真葛原に又
茶店を開いとなみける此女も和歌を嗜て早く百合葉といへる集あり
百合のむすめを町といひけり是ハ大雅堂貸成が妻なり名ハ玉瀾といへり
和歌に学んで其乃風流に従ひ玉瀾としてもおハ夫婦共に冷泉家の門につ
らなりけるあはれの其乃あしき若菜に梅なほかりそへて携へ厳来して
なる時為村卿作するを得る
にも若からぬ梅の色もかくまれさてうつる乃花さへみかぞ

芭蕉堂
大雅堂
東大谷門前
東漸寺
大谷
本堂
方丈
大雅堂
双林寺
芭蕉堂

又ある日殿参しける折ましも女に遊可といふ名を賜て其うへに白き手巾赤き蔽膝及
纈をたまはりけるに其名の世にひろまりて遊可といへる名ハ手巾をかしらに蔽膝を腰に
絡ひて給ひたりしより此人も今の世のさかり辰のころの秋の林下の八日にみまかりて
うりの物かたり今へむかしよりかたりつたへられしのみも大雅堂に蔵せるありしとそ
娘のころもくもの花を遊りて

まくず葉のうらみかねにしわか世をかこちつゝ秋の哀れを花のひとゝせ　百合

ゆくる花のあさかほとおもひしへのまその命ありかなしき　玉瀾　遊可

畫士峰十二軸　伏見城の余材にて各時で作りし物也大雅堂にあり　**石額器**　長嘯子の持物にて霊山にありしを哥仙堂と共に是に迁す　**真葛艸**　初ハ真葛原に葛の單をむすびて庵りをなせしに依て名付る

芭蕉堂雙林寺の境内西行庵の西にいとなみしあり

山家集

いにしへころおもひしかるにあらて房とやかかる上人の
菴室にゐりそみなるに鏡とおもひてよみける

柴の庵ときくハくやしき名なれとも世にこのもしき住居なりけり　西行法師

小文庫

此うらは西行上人の住給ひし僧となりしてそ西行の
よすせのあはれ山家集にのせたまひりつける
住居なるやと先その坊なれハしのはれて

柴乃戸に月やそのまゝあらた坊　くもん坂

芭蕉翁肖像　翁ハ安東に本像八寸計に彩像ハ金箔の翁の愛したる櫻樹乃
切にありし旅役せられし後のとし門葉乃丈老井許六といふ人
きよみのひ大津の智月尼といふに与へ人の為にうつしゆくりて智月の従者宗
右尼といふの芸し旅故郷越の方へ携へて越中の国の農家におゐて年久しく懐安に蔵
ありしに奥州金沢氏の手に入て其後富山の醫生橘氏といふ人是れを得て終に其に供して
かの殿に加賀人の金府の吉良の方へさいりけり此を乃ち今の宗化庵の門
人となりゆへに今命の後遺言によりて宗化房の許に遷しけりまた扇あまた芭蕉翁乃か
かるを基として芭蕉堂とよふところに安置したるに其側の東南に無菴といへるあり是
も此翁句の短冊にありけるとて名づけしと是又宗化房の伝へ更に今しも其許六か文に日
此像の筆かれハりそこの図はあの翁とよし図まで翁を恐てすゝまさるを
せめてもて像も膝延て此廃翁もてなかなからし五年を経の古木を
刻まゝりにせよとて事し後へ巻きる大きなる像ハ芭蕉の庵にあらはさんかなく
かへの思ひをしれはるを文にて述てさそひなして入れる給　許六

翁の月三日
翁のちの像に添へてさ菊もなし

芭蕉翁碑　雙林寺の門の西行庵の側に在り美濃の東華坊支考書し
て建らましく毎歳三月十二日墨蹟をしといふ事あり獅子庵の
支流庵え呉竹再住るとの門派の人々是によりて碑文の墨を修補し
歯にたえおかん修莚を催しける其碑文に日

翁師ハ伊賀の國に生まれて桃青の號ちの芭蕉堂の家に住給ひその道を継ぎ他の蕉
ととやその氏を松尾といひし年ほど四十の老と成るを武陵の深川を世に於
ぬるミ世に芭蕉の翁と云ふへり人のをそろかしける名なるべし道を伝へ置たる今
の変化にしてあを侘て遊びて行脚の便を求むといへるとしきれ松島を鳴
やうな吉ひ象鳥ハゆふ為の雨に法ととりそ富士ようし師の名に蕉しさ吾
に一字乃紀あしとハ古はまりくれとしめの碑にそ隣滅にもてるにはことの
根に籠を都のある浦に世とみくそん其後ハ在を膝に中れ二日の身め本ほと
ことほを湖水のかにうかしてその魂を出めてかの木曽寺の塔乃下に葬り乃
名を桃青ましに東華坊をして此碑を造る事ハ阿西行に遊ひ住びて
道に七字の心を傳へなきとそ
あはとみ武さしの名乃名ある　世に墨染の　見にまり　人にあらはれ
言の葉そ実　辞ありて　その昔の　み分か支れ　ものあらそ　はなてしる　ありし世の
六字ほをし

名てよきに　流るゝ水ハ　不の川や　此世を夢の　と驚てわて　その後よりの　それ奈る
汲は杜鳳の　やうりなし　花の名てふ　をさゝとふ　まさかる　人も見ぬ　来を淵浅の
花とさく　それの後に　夏を送める　背文　維石不言　謎文以傳

泰山府君　櫻の名也雙林寺のうへなる山東潮寺の庭にあり　櫻町成範卿花の盛を歎き
へ祈けるにより本に傳まて盛久しき櫻をかくいふ銘しあわり叡て此かうまりハ
洛東の佳境にして櫻多し知恩院の擇櫻ハ夏色にして世に名高し

花ちるをよめる

新古今　花もみきうれん春ハわひ生けるさんおもひのまてろはくて社　殷富門院大輔

花乃香の為そにいふろし東山　正秀

山王社　祇園鳥居の西にあり傳に三猿の像有安置此社ハむかし山門より
強訴の時神輿を振て捨置しに故に捨山王といふ又は本社の家猫落にありといふ
明治の神輿感神院にかへしほし今月おくに納りける

玉葉　神代いかに都の限に搭移して〽やらろまかく志賀の古郷　前大僧正慈源

疫伏社　祇園西門の外北の町にあり名付所疫神讃曰傳藏貴所と祭あるなりとて
又ハ此所ハ文覚法師行斎して平家を呪咀せし地なりとも云

蓮華院旧蹟　今の東大谷のまへ祇園女御の舊跡といふかなりあらん。其地前編にあらはす

盛衰記云感神院行幸の御時
祇園の西大門の大路の小家に女のおやしなふ御幸を拜し奉る　帝御目に留る
御実有りしが還御の後かの女を宮中に召されて後○に玉體に近き進らせらる
祇園社の巽に當って御所を造て居られける公卿殿上人重きに人に思ひ奉りし
祇園女御と申ける　中略　今の蓮華院と申ハ彼祇園女御の御所の跡なり
東鑑云鳥羽院の御寵愛祇園女御ハ源仲宗が妻なりし後世継云白河院御代に世人
祇園女御と申ハ加茂の社司重助が女にして加茂女御ともいひけるとぞ

鷲尾　いにしへ鷲尾中納言隆良卿の山荘今の高臺寺の地にありしとぞ
高臺寺の山號を鷲峯山といふ又當山と岩清不動山といふ
細川満元の寄進にて松庵主彦老乃建立せし岩栖院によりて應仁の
火に滅ぶ岩栖院の号ハ今南禅寺の内にありと
文永元年春鷲尾の花見にて見ありし時

續古　あ門りしむ君にこそ今日袖重し代々の昔の花の下風　太上天皇

雲居寺旧蹟　拾芥抄云祇園の南花園の向といへる地をとりて今高臺寺の地
ゆかしき花園ハ雙林寺をいふ雲居寺ハ應仁に亡ぶ
着聞集云承平神祇伯親定伊勢國にて雲居寺とハ造營せ
詞して供養ありて具布施みて雲居寺に堂を建て瞻西上人を
雲居寺の結縁経の後宴に歌合しけるに
九月盡乃ころ旅とよませける

千載　唐錦ぬさにたちそゆく秋もけふや手向の山路ならん　瞻西上人

瞻西上人雲居寺の極楽堂に堀川右大臣ありて
おもとにかへりけるによめる

詞花　いまはとて此世に結ふ縁こそ逢ひまてうきせんとそ人我身なる　彬仲

玉葉　ともむ月てみてのまうかに詠をかへるも名のこゝちろて　武部字字幸

天満宮　高臺寺の鎮守之初め上壇の地にあり近年古ここを御自画綱敷の相なる　右肖
北政所高臺院殿乃御寄附なり稍御永納の画式にせる

高臺寺
萩の花

西行法師宮城野の
萩を道珍和尚におくり
其萩今にありて侍りし
を草庵にうつしうゑ
侍し花は其国の
人さへうらやみしに

ゐけさや
居としも
うやた雅
萩の花
宗祇

小萩ちれ
ますをかの小貝
こさらつれ
はせを

高臺寺方丈 秀吉公朝鮮征伐しゆひて御凱陣の祝饗應に設ゆひし殿舎を
ここに遷を中間ハ狩野弘意の筆にして仙人の画東西ハ了溪の画なり
隨求尊 旧所に安置ス秀吉公の千躰地蔵 佛殿に安置ス政所公高臺院殿の作
御念持佛なり 念持佛之巡の松枝の画ハ古右京の筆
小方丈 上段ハ光明皇后乃白菊の屏風をうつし松の間ハ四季の松右京の同みを
帷花を書く春にして詠徳の筆なり又上段にある簾下の屏風にハ
紅白乃梅を画く是古法眼元信の筆也信玄行桑の圖乃屏風ハ土佐光信乃
画なり又信玄の像ハ平の敦盛土佐又平の筆也行の屏風ハ小方丈の常にあた
小書院 探幽の画みして雪中の圖之其次の間ハ 數寄屋 小方丈の東にあり
風吹柳を圖して古法眼之筆なるし 遠州の好なり
秀吉公影像 御魂舎に安置ス唐冠を持笏しすり坐像二尺四寸計なり
贈號豊國大明神ハ後陽成院の震翰なり
政所公影像 旧所に安置ス秀吉公の北政所之法體にて花の帽子をかし
の衣に金紋菊花の袈裟をかけ右の膝を立念珠を持し給ふ上
菊潭水 御魂舎の前の 安閑窟 山上の傘の亭といふ 政所公塔 號高臺院殿
水源ハ 利休乃好なり 塔山上にあり豊臣若狭守勝俊
從一位湖月尼寛永元年 天哉翁長嘯塔 事ハ俗名なりそ長嘯と改め霊山に
元年九月六日薨去
棲て其先ハ尾州乃人之秀吉公姻家のゆへに早く捨遺を拜し累て羽林次
將に任し若狭國に封ぜらる後ハおぼ故ありて其名を霊山より大原野にう
け住て卜居とす年九十二十余年遂に慶安二年六月十五日卒を遺詞によりて
高臺寺山上に葬る
抑當寺ハ政所公の御本願にして慶長の比の御草創之方丈書院魂舎中
門等ハ多く政所公の殿舎をうつしすゑ所之花見の壯麗筆にも盡しかたく也

奇観の十の一を記しそのの餘ハ山別名跡志あれバ前編をくみで應照合て見をつんそへし

高臺寺十境 白山巓 菊潭水 岩栖洞 蟠蛇池 湖月堂
安閑窟 相吻墳 雙林溪 祇園林 長樂鐘

崇德馬場 古ハ崇德院宮安井光堂の中にあり後世今の地に遷を初ハ大鹿にして封境
廣し鳥居ハ東西に立って下河原にあり其道の南北に並樹ありてこれを崇德
馬場といへり 應仁記ニ粟田口にハ
長樂寺光堂崇德院トモ云

桂橋寺 むかし下河原にあり旧地詳ならず 今の寺の本尊ハ観世音之今五條建仁寺町の辻
仲源寺にあり延慶乃謡曲にあるハいつれの橋とも謡へとも見え

霊山寺 霊山國阿堂の南にあり見聞随身抄に元慶八年甲辰建霊山寺
日本略記ニ寛弘元年三月八日霊山寺供養

本尊阿弥陀佛 惠心の作立像二尺八寸 圓光大師像 長一尺八寸計 御自作七十二才の御影なり
法然上人持念佛
黒谷上人傳云元久二年正月一日より霊山寺にして別時念佛始め寺説に曰
北霊山寺南霊山寺の二ヶ寺あり中原氏乃寺にして師尚朝臣代々乃墳墓ハ所にしてく

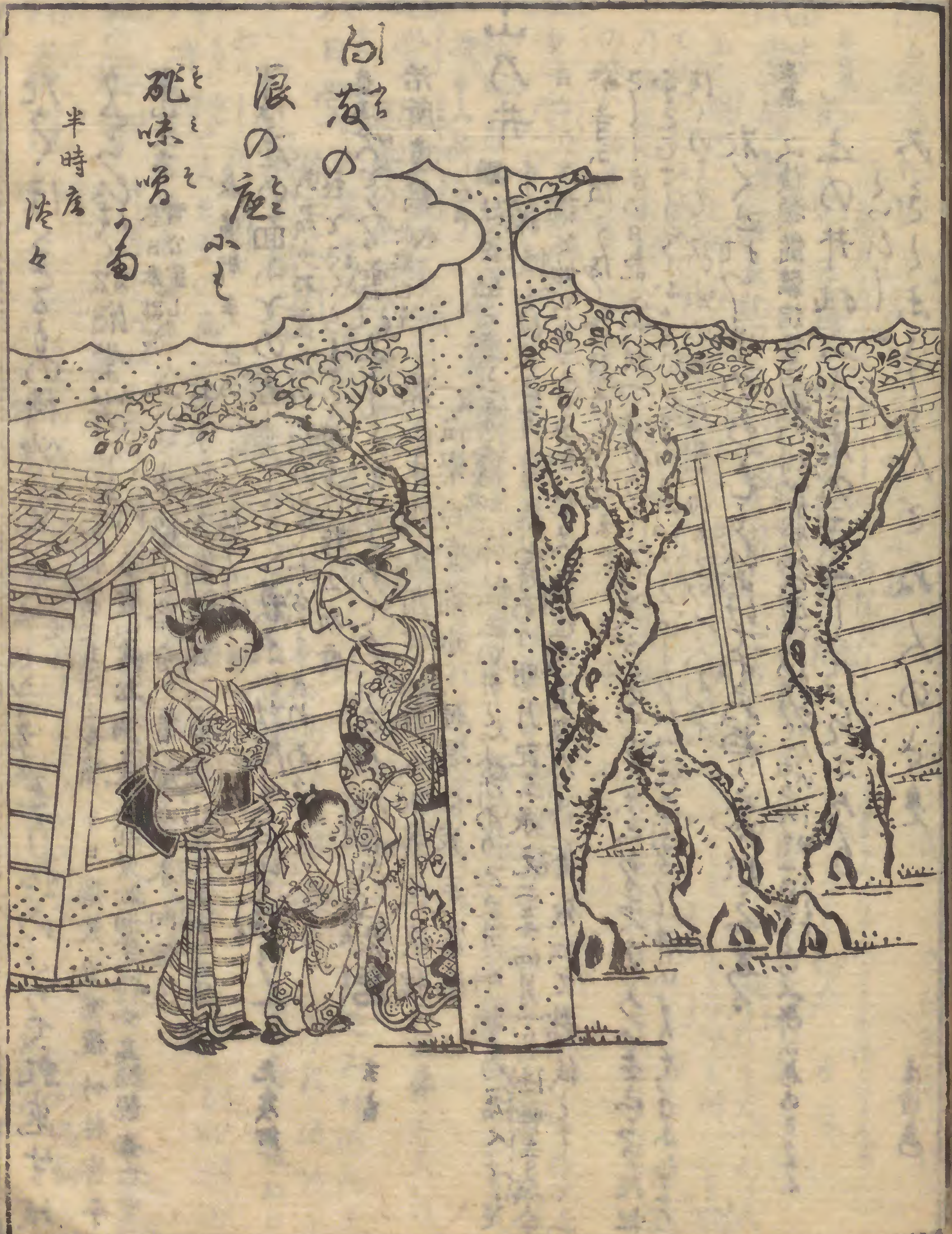
挙白堂舊跡 霊山惣門の外むかしの上壇の地是長嘯子の閑棲し給ふ所にして
挙白集に載たり故に名とし次又歌仙堂の跡ハ國阿堂の上にあり

挙集 挙白堂のまへをする様に
年へぬる宿れさくらのあるしくちかく後ハ外山も花もちらし 長嘯

同 ふもとに高き松を名付くたち
見わたせハ浮田の面の遠方の海に沖の小島ハ秋のふもと 仝

東山山家記 豊臣勝俊
とんと山の麓霊山といへ所に幽居の地をしむさしそ 半日
まうとに谷あり長嘯様伝ふる村にし百さらむすまで 寄亭 歌仙堂 まことに見の思に 獨笑

産是けらし
花の林の面
信德



向萩の
浪の庭にも
砥味噌の面
半時庵
淡々

たゝくはくまるの待必と名つくと云　ちるこそろ橋とつゝろて翁先生ぞ
くらひは松洞堂のうちに八　惺窩文集注云長嘯　半日独笑長嘯橋　竹林寄亭
羅山文集　春日奉訪長嘯公霊山洞　在霊山建松洞堂。歌仙堂松洞堂待必鳥羽観挙白堂
八坂東邊小路分　春風花木向侬之
我来竹下問看鳥　君在山中臥白雲

長嘯軒東山の山荘にありて
挙白集　庭の面にとのまとはれよく萩原は松風よりや生始るらん　光広卿
径とさくらきをそはしは橋上初雪
吹とくる雪は[illegible]谷乃宋橋　玄旨

活所遺稿　飲挙白堂水
一路入東山七月寒　佳人世外坐雲端
一盃挙白堂前水　便是仙家承露盤

山乃井

顕注密勘云東山霊山のかたはらに山の井といふ所あり山之井中務乃居人とあり余が詳おし侍く山井寺といふ寺あり明月記云永元二年四月一日法性寺殿令日より十講を始らる三日五部の大乗経入道殿乃御筆紙以て料紙とし山井寺に渡らせ給ふ[illegible]

[illegible]

家集　又後頼髄脳書曰[illegible]

山の井はふかきのさへ[illegible]
みきとふうしん[illegible]人のさき　赤染衛門

藻虫庵旧址

霊山のかたはらにあり今詳ならず又洛外嵯峨光寺の内にあり名あり後世まで[illegible]

挙白集　あはのる藻にうつし[illegible]

鼠堂屋敷

盛衰記曰[illegible]

経書堂

[illegible]本尊聖徳太子

化解脱の因
授あ所あり

嫗堂

[illegible]

大日堂

経書堂乃南にあり本尊愛染明王坂安置又ある所あり

輪蔵

諸人に結縁せしむ

仲光院

大日堂の南にあり本尊愛染明王歓喜天安置仲光院の如にあり時宗本尊阿弥陀佛[illegible]

宝徳寺

馬止の側にあり本尊如意輪観音[illegible]

地蔵院

初めは妙心尼の持尊[illegible]十番なり

清水
三年坂
清水寺
寳徳寺
大日堂
経書堂
松原通

清水隨求堂 清水寺西門の内にあり本尊隨求菩薩大日佛彌陀佛の脇に安置す脇士ハ多聞吉祥の二天を左右に置く享保の初盛松阿闍梨の建立也

轟橋 田村堂のまへにあり実ハ此橋にあらず今二年坂の下に流る溪川にありきを山の井の瀧といへり一ハ清水の乾より靈山總門の前を経て大仏に至る道ありて此溪川に架たる橋なりけれバ轟橋といへり著聞集にも見へたり所謂長嘯橋も是なりとかや

尾振谷 清水の南清閑寺の間東西に通ふる谷なり清水寺境内宝蔵堂の中に南ハ限尾振谷の文あり

南藏院 瀧の下にあり本尊虚空藏菩薩ハ聖徳太子の作坐像一尺餘南院むかし大和國内山にありて圭膳寺と号す皇太子の妃圭膳乃皇后の母阿比丘尼乃草創之後世ここにうつりけり此所に鮑貝の酒器ありて称宮其大器にて酒を飲一息中に飲をそこの故に鮑一と号す酒に縁して深く遊ぶの謂なりとかや其名を記を故に此酒器の名と深く嘆とかや

九重丹楓 清閑寺高倉院帝陵の側にあり此帝紅葉を愛し玉へる事平家物語に見へたり 後西院の御製の和歌清宗寺にあり
此君紅葉を愛して

うつり香のまふ山のもみぢぞやすらはれむかしのかたみ 御製

秋葉社 同所山上にあり高倉院紅葉を愛し玉ひし故其遺跡にあり華木巻に曰秋ハ龍田山より来たりて紅葉を染る此人に林を染る神といふと云世俗此神を秋葉山三尺坊と誤りといへり 岷江入楚

獅子口 此石を獅子口と云獅子口の形に似たるにより此名あり

要石 當寺客殿の庭にあり此石より洛陽の気象を見るに扇を立たるが如くなりとぞ

覚明水 客殿の下にあり元當山の末院なり三千坊の内なり又法華坊覚明世を遁れて此に住しけるとなん

六條院陵 帝陵記云東山清閑寺にあり蹟なし或云山槐記云治承五年正月十四日新院高倉己に崩御し給ふ今夜邦綱卿乃清閑寺の小堂なりて帝王編年記云安元二年七月十七日新院崩御し給ふ御年十三六條院と号す是二條院の皇子也同年八月三日乙未東山の寺に葬り奉る

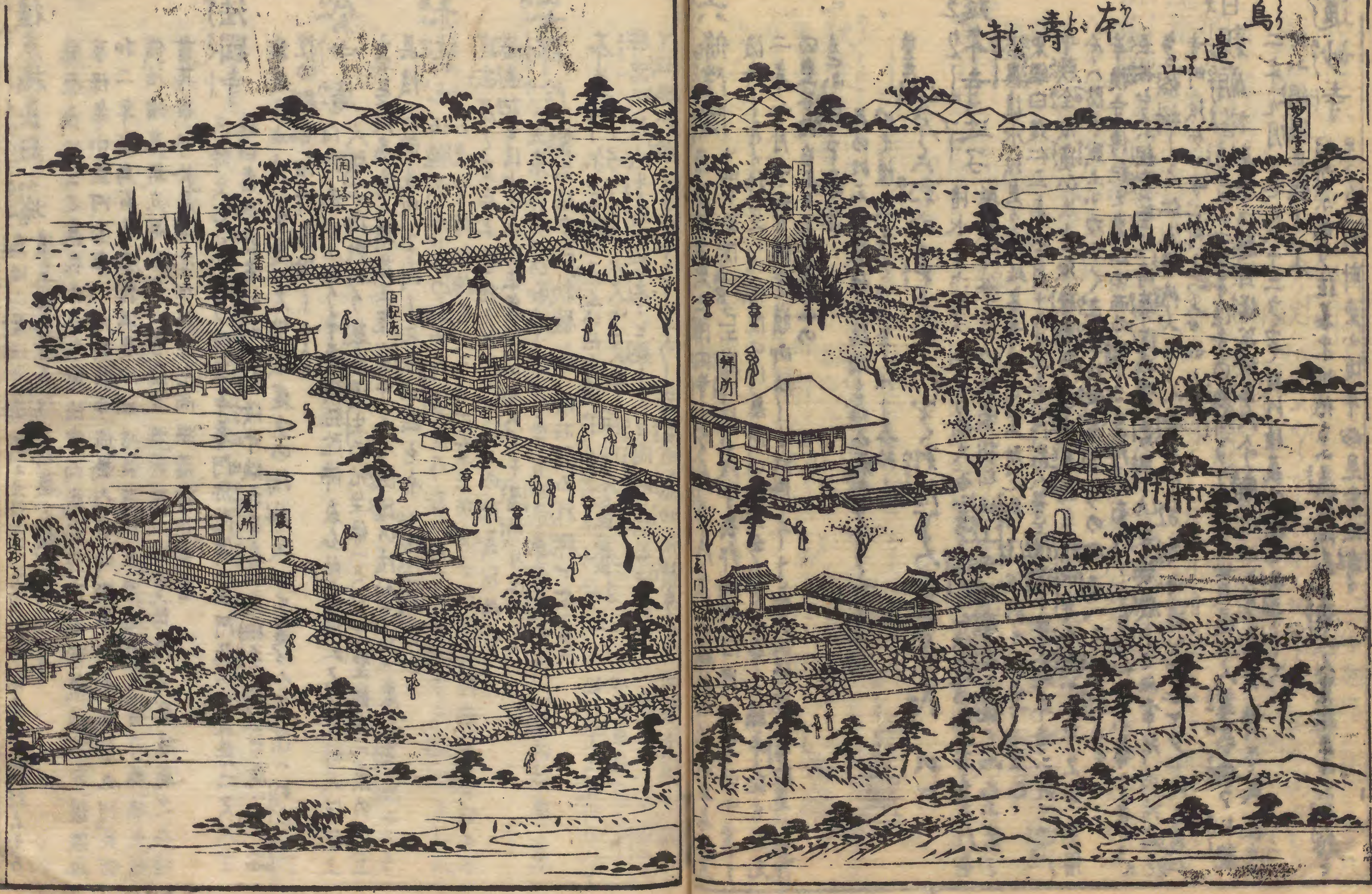
後京極 花の色は二条院傍に清閑寺の山荘にまかりて心そ後胡花といふ事をよみ侍し

此さとハねかうをゑにしひとりのみくれそいさよひふらされ 阿

延年寺辻子 清水寺六坊の側より西大谷へ通ふる細道也此道の南に谷あり是を延年寺谷といふ壒嚢抄曰坂上田村麿鹿を獵て此山に来り至る所を延年寺谷とはいふ是今の延年寺谷也東鑑曰建仁二年七月十六日左京の御家人等を催遣し東山延年寺に於て播磨守頼全を誅戮せしむ盛衰記云清水寺合戦に永万元年寺僧今ハ防ぎ戦ふに力なく未来延年寺と二つの間道へ落行ける本願寺傳記云東山の西の麓鳥辺野の南なる延仁寺に葬しまうらせ遺骨を拾ひて親鸞聖人御葬送の時ハ其骨此寺にて無常所の地名なる俗称して仁と謂へり今ハ万寿寺通と万ジヤウジ又を建仁寺町ハケンニン寺町といへるが如し

日親廟塔 東山にあり本法寺の墓所なり同寺十世日通上人靈柩を葬りて日親真筆の題目塔を建り今廟所にあり日親ハ姓ハ平氏長享二年九月十七日八十二才にて寂す法義の為に若辛して世に鍋冠日親といへり

通妙寺 同所にあり法華宗妙伝寺に属す同寺日穏上人寛永年中に草創す是より二町斗東に近年妙見堂を建る


鳥辺山本寿寺
妙見堂
日親像
拝所
表門
開山塔
本堂
番神社
表門

後京極良経公塔 鳥辺山要法寺墓所に至る道の右岸の上にあり傍に標石あり 後京極摂政良経公之墓と鐫る烏石の筆

藤原良経公之墓在于洛東要法寺而歳月悠邈荊榛荒凉不可復識也享保年中並河生奉大樹鼎命脩畿内志時斲木以表而今也朽矣明和二年春烏石葛辰翁偶遊此地嘆其蕪穢且悲蟋蟀之吟乃誅榛莽荊脩治墳墓新立標石祭以香醪且賦詩蔵于其寺住持日慧感翁之志請書其事予於是識赤水藤原岳尚撰 蒲野谷豊書

法國寺 五條大谷口にあり時宗本尊阿弥陀佛ハ安阿弥の作立像二尺五寸 額曰當伽藍者江州小谷城浅井備前守息女亜相秀頼母公為二世安楽建立也といふ本堂ハ大佛殿建立の殘材を以て建る也 書院ハ新上東門院の殿舎を此所に寄附し給ふ

袋中庵 旧跡南方にあり本尊阿弥陀佛恵心作坐像二尺五寸許又法然上人張子の作あり然谷遊生の作坐像一尺許又聖観音ハ東の小堂に安置す當庵ハ檀王院袋中上人隠棲の地なり初め東山鞍馬口にあり其後大佛瓦町にうつし又ここに移す今の僧徒職を

赤築地 五條大谷口より松原経書堂乃あたりに出る道をいふ土人赤辻と呼ふ 知恩寺絵詞傳に云文永の比聖光坊貞子然阿弥陀佛勢観坊貞子蓮寂房と東山赤築地に於て四十八日の談義ありし 盛衰記に云清水の傍赤築地二の関乃へそ蓮行久に

安祥院 五条大谷口の坂にあり宗旨四宗兼学梶井御門跡の法流にて霊元法皇の勅願所 後西院の御牌を安置す

本尊阿弥陀佛 丈六七寸五歩 恵心の作立像 開山木食養和上人 姓ハ村上氏駿河の人なり此人無双の信心者にして駅路の行人牛馬の苦労を愍しく日岡峠渋谷坂などの嶮を高さ九尺の人なく て坂路の嶮しきとやすらかにし石を敷く其勲功を積む人又ハ因幡堂乃石橋

七條八町の二箇の石橋御所八幡乃敷石灯篭大殿の井戸其外諸寺の道作り来上人一生涯の中かくのごとく自ら持戒圓満乃積功顕然たり又ここに享保年中乃建立之木食上人ハ老後日岡峠に梅香庵を結びて梅香院殿の御本願となりて退隠して終をとられて

西光寺 安祥寺の北に松原通の南側に浄土宗知恩院に属す初め山科東野村にありて空也寺と号す大雲院九世高誉上人再興して今宗と成る寛延二年今の地へ移すと

本尊阿弥陀佛 安阿弥の作 空也上人 自作立像一尺七八寸

空也上人廟 本堂の北にあり中に石櫃あり蓮花を鐫る遺骨を納む傍に小石碑を立つ撰者ハ泉涌寺高泉和尚なり

聖観音 空也上人の作本堂の脇壇に安置す朱雀帝の皇妃熙子の御安産御祈祷乃為に作れり慈しく其頂文を腹内に収む

六字名號 空也上人の筆一生涯の中に七幅書給ふ其一幅なり

其の歌をよみ給ふ

新勅撰 有漏の身は菩提にかゝる露ながらそ蓮にやとるなりけり 空也上人

阿佛家 六波羅密寺のひがし南側にあり世人阿佛房といふ又前栽に小祠あり

うらみわびまたじいまはの身なれどもおもひなれにしゆふぐれのそら

西福寺 六波羅密寺の門前にあり浄土宗本尊阿弥陀佛春日の作坐像三尺許 四十八願所巡りの卅一番之又土佐の檀林安置す弘法大師の作

焔广堂 旧所小側にあり小祠堂の作世尊王の像といふ入口にあり此辺より六道辻といふ焔广堂ハ百練抄にも見へたり

六道迎鐘　珍皇寺にあり毎年七月九日十日于蘭盆會に出て諸人に撞しめ聖靈を迎ふ
鐘とよぶ此鐘ハ慶俊僧都これを鋳て土に埋しめ三箇年を経て堀出すべしと寺僧に約して入唐しけるが其後別当の法師二箇年を待かねて堀出し撞ければ其聲唐土に聞へけれバ慶俊僧都大に歎じて曰此鐘ハ人の撞ずとも自然に鳴んと思ひしにはやく堀出せしと降乃口惜さよとぞいひける僧都ハ弘法大師の祖師なりしとぞ古事談或ハ今昔物語にも見へたり今も此鐘ハ遠境に響く事他に並びなし希代の靈器なり

今昔物語云　于蘭盆の日まづしき女の祖のためにとて其身の着たる色の衣を盆に入て蓮の葉を蓋とし人に蔵入て愛宕の寺に捧参りて拝み泣く去にけり人あやしみてそれを見けれバ是なりかくぞ書たりける

　多てまつる蓮のうへの露ばかりこれを哀れと三世の佛も

城東寺　建仁寺町松原乃南にあり本尊ハ薬師佛を安置し傳教大師の作なり應仁の乱後此寺も破壊して纔に佛首許残りてありしを後世佛体を添て今ハ丈六の像とし小堂にあり初めハ天台宗應仁年中に禅宗となりぬ南禅寺楞厳院の兼帯所となる

平教盛卿家　五條大黒町の北の町を北ハ門町といふ是六波羅館の北門之委ハ前編に見へたり

平家物語云　宰相教盛ハ入道相国の御宿所ハ六波羅惣門の脇なりされバ門脇の宰相とぞ申ける

上行寺　五條建仁寺町乃東にあり法華宗開基ハ日秀上人本願ハ織田右京助信定慶長十六年の建立也初め此地に住し日経上人佗宗と法論し騒動に及ぶ是によりて公勢より慶長十四年十二月廿日日経上人の徒弟五人く共ハ六條河原に於て劓刑に行るゝ故に劓寺といへり

元和元年十二月に後水尾院の綸旨を賜ふ今寺号にあり洛外の所々霊印乃石卒都婆を建るハ此日秀上人之一宗乃門徒出きを巡拝せしむを御塔巡りといふ

窄岸　若宮八幡の南音羽川の岸をいふ
今窄谷といふ此地に敷石あり是獄屋に用る所なりとぞ

専定寺　大佛西の側にあり浄土宗本尊阿弥陀佛ハ恵心の作

獅子地蔵　六万躰　彫刻の由緒の有る像之
小野篁の作之称の傍伏見谷左近といふ者此尊像を帰依しある時吾妻の方へ赴くに大井川を渡る所にて一町斗り野流を具時地蔵尊を獅子と化し遁に命をたすけまふそれより世の人獅子の地蔵と呼ぶ

剱宮　新熊野の南林の中にあり祭る所白山権現第一皇子

雲龍院　泉涌寺の塔中之泉涌水の上にあり佛殿の本尊薬師佛坐像二尺五寸後光厳院後円融院二帝の宸翰を安置せり又同所後光厳院後円融院後小松院の三陵あり當院ハ泉涌寺より古来の塔頭之開基ハ竹巌律師

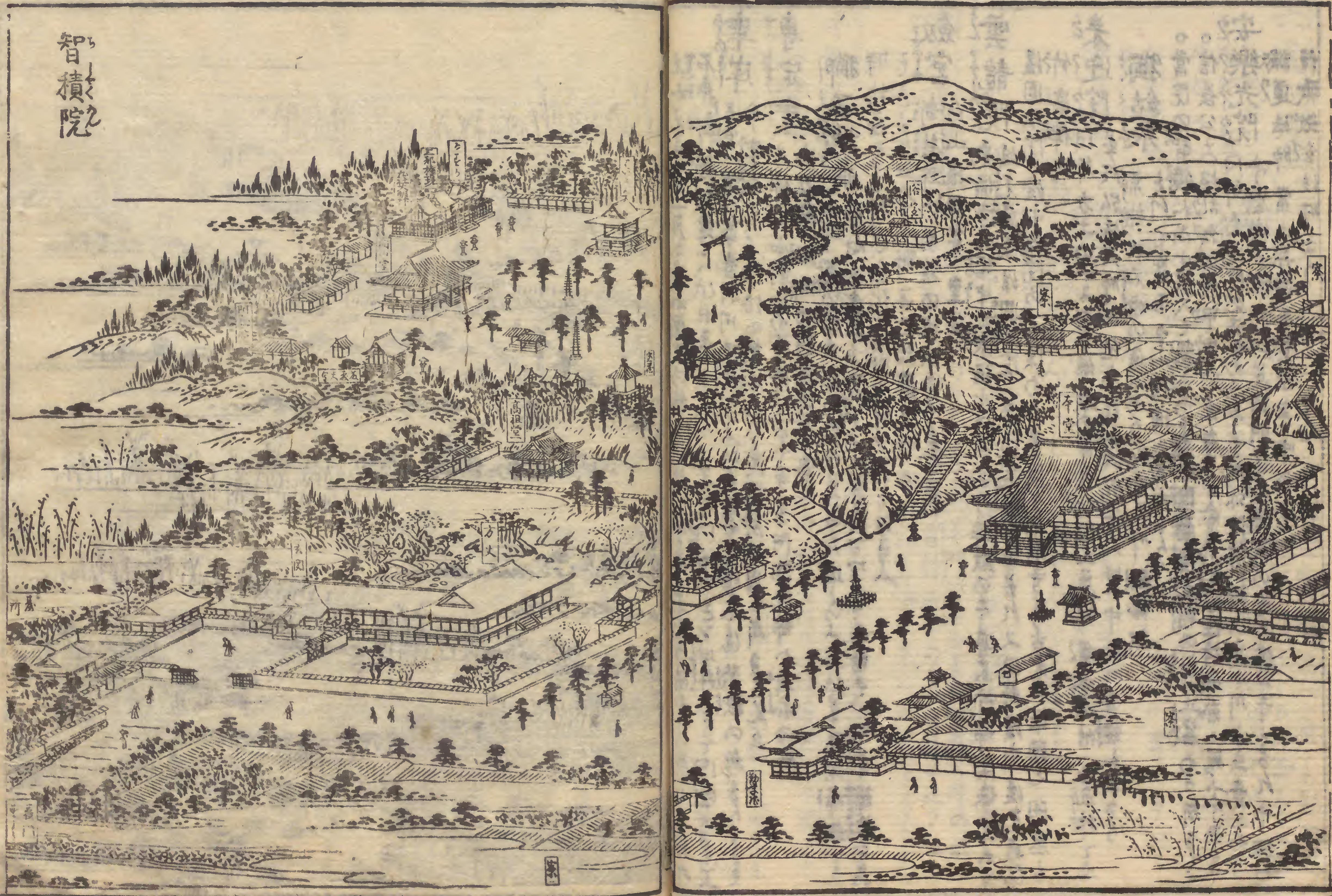
来迎院　同所方丈の北にあり佛殿の本尊弥陀三尊佛運慶の作又荒神を安置せり弘法大師の作當院初ハ弘法大師中興ハ智鏡和尚なり

獨鈷水　荒神社石壇の傍にあり弘法大師獨鈷をもつて穿ち玉ふ所也涌出る水なり

○當院の智鏡和尚宋に入て懇志ある蜀の隆蘭溪来朝の初め止宿ある所なり

○信長公大坂乱戦の砌甲冑の上に懸ける念珠小蓋を住持に賜ふ今尚あり

安樂光院　同所来迎院の西にあり本尊阿弥陀佛初め上京小川上立賣にあり今安樂小路といふ足利持明院基頼卿の宅之後世寺となる中興ハ誠蓮法師當寺再興を寛永年中にして住職法師なり


智積院（ちしやくゐん）
高祖堂
方丈
本堂
浴室
寮

智積院門前
日吉社
末社
末社
末社
本社
智積院
表門

観音寺 ハ同所来迎院の北にあり本尊十一面観音ハ弘法大師の作立像二尺計 脇士左不動明王智證大師の作右毘沙門天運慶乃作当寺ハ創乃本願ハ山本左大臣なり花山法皇興行しゆふ西国巡礼乃札所観音の其一員にして世人新熊野観音と称ス

善能寺 ハ同所観音寺の乾二町にあり本尊聖観音稲荷大明神老翁に化して作る所之立像三尺三寸 脇士左稲荷大明神 稲荷ハ老翁の形弘法大師の作なり右弘法大師立像二尺計 稲荷大明神乃作なり 作る也本尊ハ初八條二階堂に安置ありし所なり前縁に見へたり

戒光寺 ハ泉涌寺総門の内にあり本尊釈迦仏立像一丈六尺作者未詳頭面を自然の出現なり開山曇照和尚宋国より持来して其後ハ運慶作なりしとぞ当寺初めハ猪熊八條にありし今戒光寺町といふ其後上京所にうつりて正保年中今の地に移して泉涌寺に属す

新善光寺 ハ戒光寺の南にあり本尊阿弥陀仏一光三尊信州善光寺に同し後深草帝名一坊に勅して鋳させ給ふ紫金仏なり初めハ洛陽大宮通一條の北にあり後世ここにうつすを

悲田院 ハ新善光寺の南にあり本尊阿弥陀仏立像二尺五寸計当院ハ聖徳太子乃草創之元正帝養老八年に鰥寡孤独の輩及び病者を救ハんため施薬院悲田院をいとなミ其人里に餓して後世竟然上人再興して如周律師中興してここに遷し配上八ケ寺として泉涌寺の

常盤宅址 ハ泉涌寺落橋の北半町計にあり義朝亡ひて後常盤御前源泊して時遂に其美艶を貪して平相国入道の妻となりてかの六波羅の館近き人に此所に住しめ玉ひしあらん其地今藪となれり

落橋 ハ大和大路の南より泉涌寺路にあり一名髪浮橋といふ又化不常の義之源氏物語に出世に大路橋といへハ非なり落橋蘊藏記に出づ

瀧尾社 ハ大和大路一橋南爪にあり祭神藤杜の属社なり額瀧尾社篆字 例祭六月廿二日

五葉辻 瀧尾社の南乃辻をいふ足則いふしへの泉涌寺門前之後中記云仁治三年正月廿五日今夜四條院御葬礼経五葉辻入御泉涌寺云云

三聖寺 ハ東福寺北門の内左にあり第一門に金剛力士の像を安す長八尺計運慶乃作也像霊験の事大友興廃記に載を初めハ旅業に立しと此門の中央に石あり元ハ獅子の形之乱世に破砕す今尚石に獅子毛の紋あり牛を放畜この者来て此石に觸り則ハ病難を除く事ありしとぞ 佛殿の額 修正 本尊釈迦仏 左迦葉阿難 開山寶覚師像

愛染堂 ハ同所の西街道の東側にあり本尊ハ運慶の作之同所に五大尊を安ず当寺ハ東福寺より初めの建立にして天台宗なり

万寿寺 ハ三聖寺の内にあり九重山と号す初めハ樋口通万里小路にあり永享六年回禄の後此地にうつす五山の一員之開祖覚空禅師

後成御墓 ハ東福寺塔頭南明院にあり又浄如尼墓あり 或ハ後成卿の乳母といふ

自然居士塚 ハ東福寺東南の山にあり或書に曰自然居士ハ和泉国日根郡自然田村の産なり故に名とす始ハ法相を学び後禅宗をおつく南禅寺大明国師の弟子となる聖一国師の為にハ孫弟子之東山雲居寺に居して群生を聚め説経して歌舞をなして其深意を演ず東福寺の龍吟庵ハ大明国師乃本庵之此ありしの否に自然居士も移くあらしとぞ

西寺古鐘 東福寺にあり西寺ハ守敏僧都の寺なり

海蔵院 ハ東福寺塔頭之二虎関の北にあり虎関師の住し所之礦磔集云海蔵院にハ虎関自筆の元亨釈書あり

郭公の名所ハ
新古今
さみだれの月ハつれなきみ山よりひとりもいつる郭公かな
定家

梅雨
白屋黄梅雨
蕭蕭撫枕寒
南山朝暮色
不作出門看
服元喬

月輪　東福寺の東より泉涌寺に至る所をいふ兼實公の山荘之月輪にありしと
号く東福寺四至の文に云東ハ月輪殿の墎路通を限ると云々
月輪といふ所にまかりてえ補まかりし時ある庵の花の
花紙りそありそよミ侍りける

拾遺
春の花盛と見れしを庵の風にさそひもうけぬ波をたちぬる　經定

同
ゆきの日に桂の宿をうつしゆく人をくる月輪にくらぶるかる　輔親

月輪在所今にあたる

玉葉
春のゆきよハの山風そのにハ立田れみしれ花ちろうしてぬけ　家隆

光明峯寺　東福寺方丈のうしろ　光明峯寺趾　東福寺偃月橋の奥にあり
即宗院の南谷といふ　亡滅の後毘沙門堂あり故に
毘沙門谷ともいふ本尊ハ今東福常楽庵の閣上にあり聖一国師年譜云建
長四年二月廿一日藤丞相道家公薨ず年六十か四條院の外祖光明峯寺に葬る
光明峯入道お摂政の墓所にぞよミたる

続拾遺
義ありて春れゆく山ふもとに霞のかかる夕ぐれしさハ好けりさりける人　九条前摂政太政大臣

地蔵堂　三聖寺お町にあり立像八尺計張子の像之近年　運慶之作又旋円すゞし
坐像一丈計定朝のつくりし地蔵菩薩を安置す

法性寺旧蹟　拾芥抄に曰九條河原にありしもの今摂りに九條里乃東にあり
昔の寺にして阿弥陀堂の名あり當寺の本願ハ摂政太政大臣従一位
忠平公之天暦三年八月八日薨ず昭宣公の長男にて諡號貞信公

法性寺観音　東福寺門の前にあり三面千手観音を安置す長一丈八寸脇佛に
八部衆天頂に二十五面あり其日の佛千手三面之左邊ハ三宝荒神右邊
霊にありて旧號再興を洛陽にありての第廿二番之今浄土宗に属す法性寺諸尊の内之四乃本尊なり

お大納言為世人々にさそひて法性寺に花見に侍りて
十首哥よミ侍りけるなかに

新葉
家ゐしふおれはまちもろくろにねさえあり山椿の那　為明

法性寺の花を見てよみ侍りける

家集
ちりしける花のみのそとひとめ見し庵のかくさを　光俊

源氏物語　あけまきの巻
ちりまよふほどしきものかうれしまとふ秋をぬきそそぬ

羅刹谷　東福寺と泉涌寺の間の谷をいふ元亨釈書延暦寺源心傳に出たり又
泉涌寺八景の題に羅刹谷夜雨あり又東福寺旧圖にも見えたり

薬師堂　大和大路三橋小爪にあり本尊薬師佛ハ丈六坐像春日の作といへる
法性寺金堂の本尊なり傍の小堂に役行者を安置す恵心の作立像

遣迎院　同街三橋の南二町計東方にあり本尊阿弥陀佛ハ恵心の作ともいふ
三尺計京極遣迎院の兼帯所にて此地霊上人住すと見えたり

安倍晴明塚　同所本堂の南にあり　獨鈷水　同寺にあり門前坂上の
此地居住せし所なりと　井町下之町といふ

毘沙門堂　遣迎院の南一町計東側にあり是も法性寺伽藍佛なりとぞ
今此所の町中にあれども

田中社　同街三橋の南之町目西方にあり祭神稲荷五座の一神なり世人
稲荷叔母乃神なりといふ古ハ田野の中にあり故に名とす

古今著聞集
和泉式部忍びて稲荷へ参りけるに田中明神のほとりにて時雨のしけれバ
なりふいくそをへさしとおもひけるに田かりける童のあをといふものかりてきて
まいりにけり下向の程にそれにかへしける此襖をかへすとてよみける次の日

武部なにしの方をうかゝひてかくれゐたりしに大きやかなる声のみ聞えてきこえけれは
かれともなれぬ者ともえては山みちにはせうとくしたひてゆきけるをひろはれぬをあはれそ
明暮なる稲荷の山のお祭りてあそひけりしより思ひかえて
と書るかの武部なにかしといひしはきれをかひてしはきれくへといひてよしといひけるとなん

極樂寺 同街田中社の南東方にあり本尊阿弥陀佛 鑑真の作長三尺計 脇士焔魔王 地蔵尊 源仲極樂寺の旧號をいてくむ再建す

十王堂 門の外南にあり本尊は焔魔王にして十大王を安置す此前の町に弘法大師の堀しめされし井あり其内の土をもて十王を作りたまふと

稲荷山 枕草紙云いなりにおもひおこしてまいりたるに中のみやしろのほとりをわりなくくるしきを念じてのほる

壬二集 稲荷山杉の青葉も明ゆくの空よりかすみかゝる森の梢　家隆

家集 独りのみ我越えなくに稲荷山春の霞の立かくすらん　貫之

稲荷御神詠

続古今 しれむ人のねかひをてらさんとて浮世にのこる三の燈

稲荷坂 新熊野より稲荷大明神の社前とうすん 新熊野より稲荷三ッの峯へ詣る道なり今車坂といふ是いにしへの順路なり稲荷行幸の車此道を経るとも田中社をいにしへ此道にあり

堀河百首 とそくとく宿を出ていなり坂のほれはくるゝこと人の形　兼昌

異本應仁記云文明二年醍醐山科八ヶ宝院の御領分なれハ合力せしとて未だ武田相和へよりけるかみ目附に多賀豊後守高忠か従者骨皮左衛門尉道源山科より稲荷山へおし越稲荷社に勢ありて倉出羽守と示し合せ山上乃社に陣を取る伏見木幡藤森三栖深草淀竹田なと法性寺小路まて目の下に見おろしけれと
大路卿入降参しける

還坂 是稲荷坂の別名也花山法皇清少納言なと此道より三ッの峯へ詣事旧記に分明なり

閑居友云ちかきころいなりの下向坂の峯のうへにあやしけれとも事なりたちしさそいてなかひさしく入道そおもひかくて西にむかひてそゆく日数かかさなりとあり

定家卿文書云法性寺後成御廟山林の末なりしは上のいなりのかへりさかのとをり南への谷をかさりて之れはいなりのみなれはそのみなかかさりてそ之

林叢略記云御蔵貴所稲荷山に居して護法形を現して花を擁する数多
眞言傳云稲荷山僧正峯ハ権僧正壹演行ひ給ひたる跡とあん中比稲荷
社家説云今山間に神座の跡ありこれを御前の瀧といふ此瀧の水
岩あり雷岩といへりくむかし神僧ありて雷を咒して此岩間に繋ぎとゝまりて房の崖といふ所ありいにしへの僧坊の跡なるへし

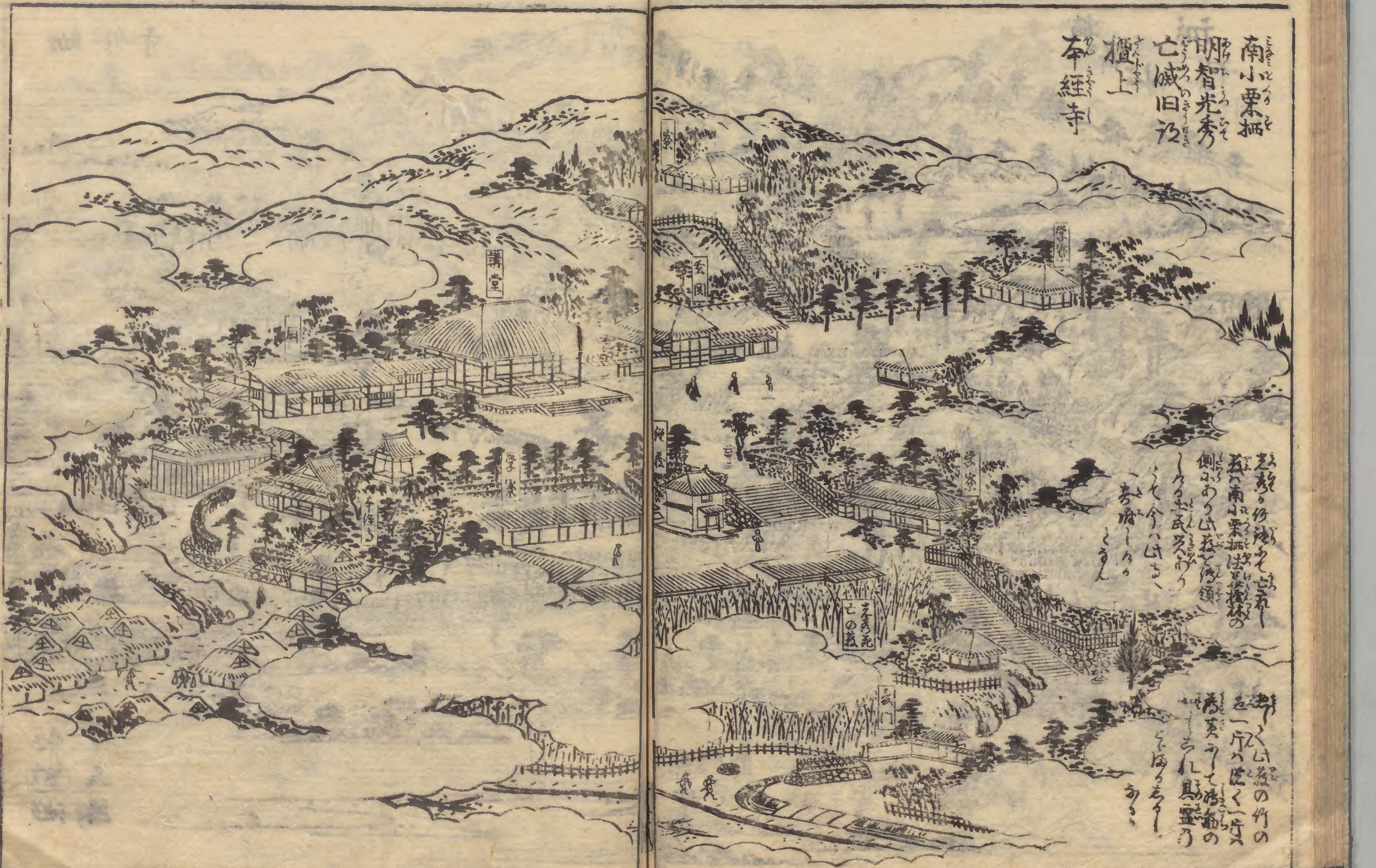
劔池 本社より東南の方五町計にあり 劔の名詳ならす

○ 池の面に月をならふる山は稲荷の山の三つの御垣に波やよすらん

沢下ハ稲荷山の麓て東の藤森山科郷西の山より東福寺
小野勧修寺を経て花山より小野にいたる

稲荷山初午圖

国立公文書館
National Archives of Japan


南小栗栖
明智光秀亡滅旧跡
攢上
本経寺
講堂
玄関

勧修寺
氷室池
十五勝

勧修寺
八幡宮
三條右大臣
本社
加茂社
神木
社司

花山稲荷社
良雄断食石
栗栖野
田村将軍墳
稲荷社
断食石
花山村
田村丸塚
鬼出草も枯るや田村塚

巖屋明神社 山林西の山にある鳥居の額は巖屋大明神石野宰相基顕卿の染筆 社記曰祭神宮道祖神寛平十年の勧請にて主人生土神とす例祭九月十六日神楽二基

大石屋鋪 岩屋明神の鳥居のまへに側にあり大石内蔵助良雄浅野家断絶の後潜居す当村市川氏の家蔵に大石の遺物あまたありといふ

近年碑銘を建る其文曰

是故赤穂侯重臣大石良雄所假居之處也如其忠精光誥既傳而膾炙人口不復贅焉嗚呼百載之下并人與骨皆已朽矣乎豈嚴并地而思并人懔々如有生氣豈非其忠精所激名聲不朽者乎今也鐫石以誌焉顧當后之過此者乃有涕以從焉矣銘曰焦心飲膽薄言潛鋭死而不死名姓永光建石者為誰伏水人武府人孫八宮部義正同所惠五郎上田正並書之者為誰龍公美子玉也干時安永四年乙未冬

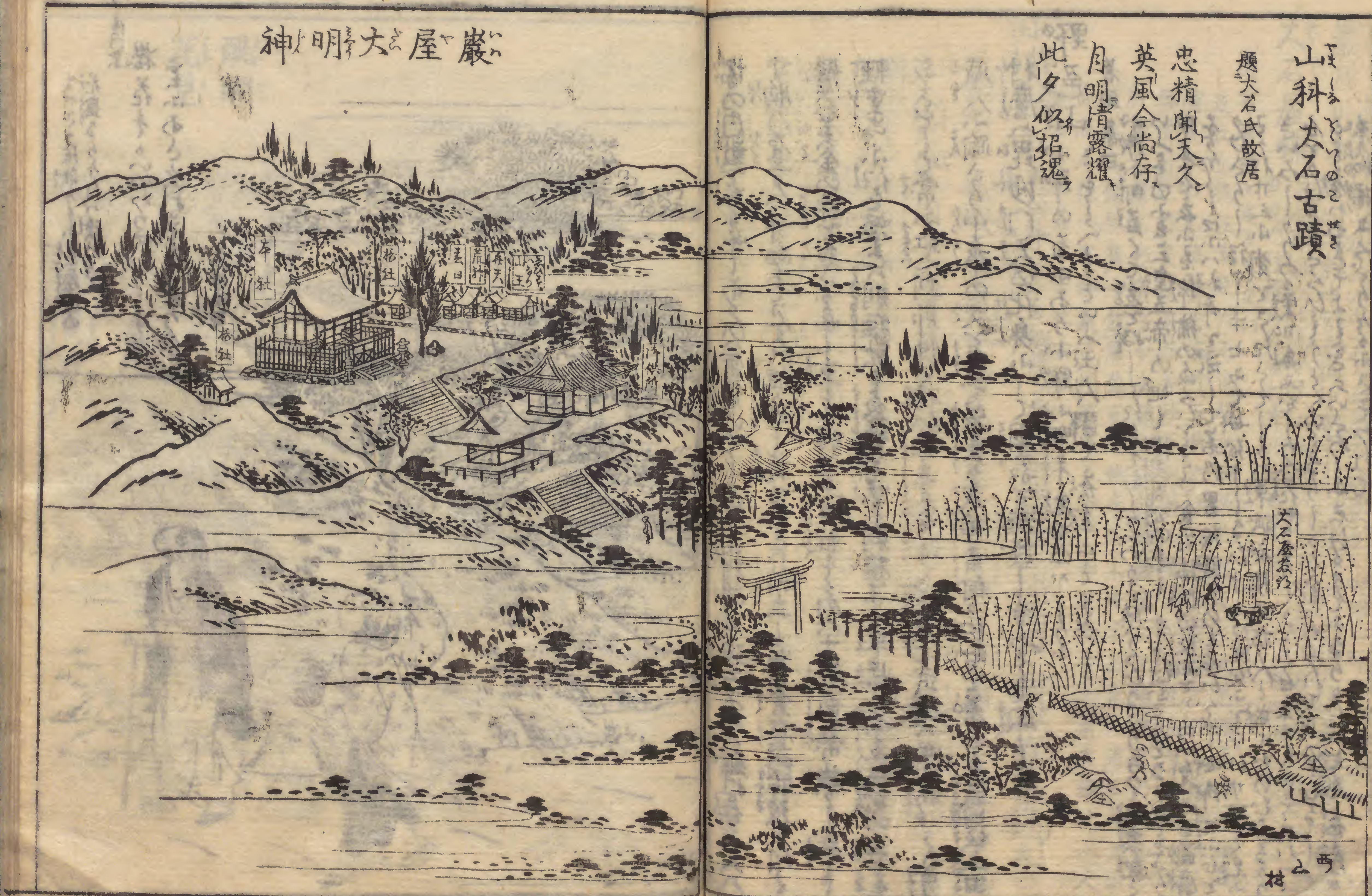
田村麿墳 栗栖野村の南勧修寺へ行く道の東一町計にあり

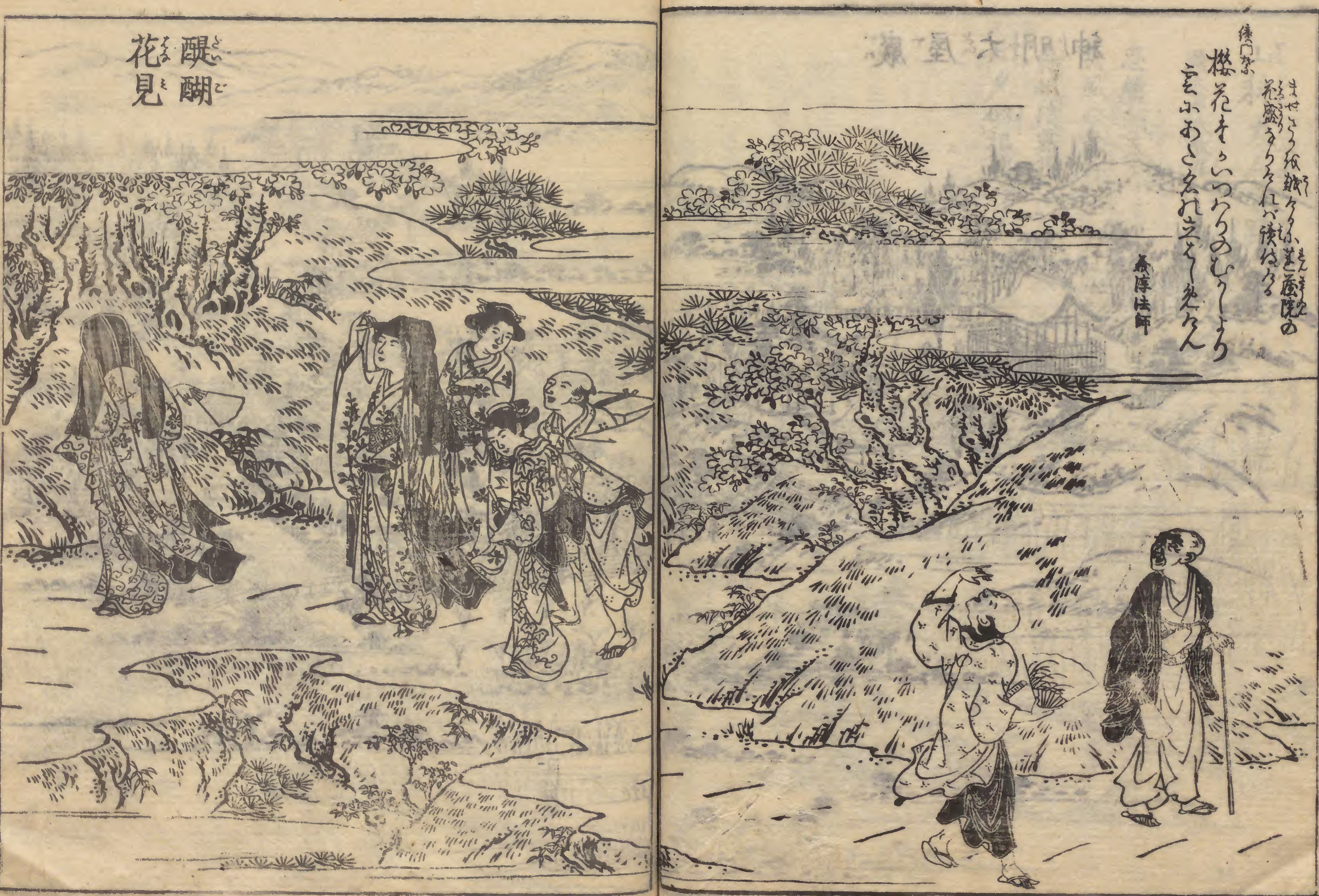
傳曰坂上田村将軍は贈大納言苅田丸の二男にして嵯峨天皇弘仁元年に正三位に叙し中納言に任し同年九月に大納言兼右大将に任ず同二年五月廿三日奄然として薨ず年五十四 勅して綵帛を贈ふ 絁六十九疋 調布一百端 商布四百九十段 米七十斛 役夫二百人 延喜式出 桓武帝第八の皇子葛井親王は田村丸の妹全子女御の誕生なり 所之天皇政を聴給ふ事一日同五月廿七日贈従二位の宣命を賜ふ同日山城国宇治郡栗栖野に葬ける 馬背坂 勅によりて甲冑兵杖劔鉾弓箭糒塩等を調へて合葬せらる王城に向ひて立ながら是を葬る後国家の非常天下に災害ある時は塚の内鼓をうつが如し或ひは雷電のごとし又田村将軍現存の時は躯の長五尺八寸胸の厚一尺二寸向ひて見る時は偃るが如し背て見る時は俯るがごとし眼は蒼鷹の眸を欺き鬢は黄金の線を乱るが如し重する時は二百一斤軽する時は六十四斤動静機に應じ軽重心に任す怒る時は則猛獣も忽斃る咲む時は則稚子も早懐く面色桃花の色あるごとくして常に紅に到節性を持ひ松色冬を送て獨翠し武術は世に秀でて勇威人に踰たり中華の文を学で張良が武略蕭何が仁智を兼たり或曰坂上田村麿は毘沙門天の化身にして国家を擁護しまへるとぞ聞し

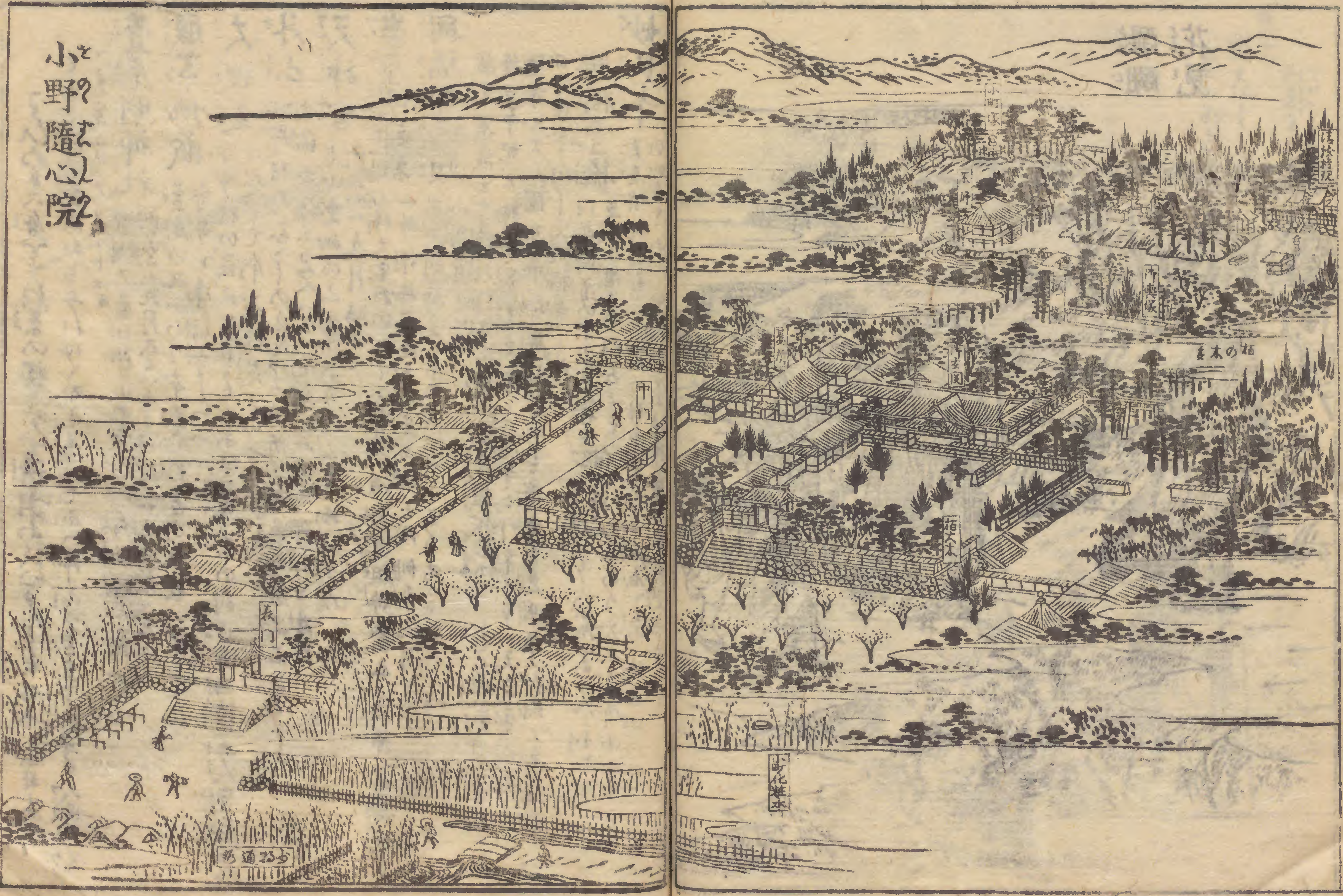
野色山 小野の南にあり小野小町年老てさまよへしといふ土人謬て夜色山といふ

著聞集曰

小野小町若くて色を好し時もてなしありさまたぐひなかりけり壮衰記といふものには三皇五帝の妃も漢王周公の妻もいまだこのおごりをなさずとぞかきたるかゝれば衣には錦繍のたぐひを重ね食には海陸の珍物をとゝのへ身には蘭麝をうつし口には和歌を詠してよろづの男をば賤くのみ思ひくだし女御后に心をかけたりし程に十七にて母をうしなひ十九にて父におくれ廿一にて兄におくれ廿三にて弟にわかれしかば単孤無頼の独人と成てたのむかたなかりきいみじかりつる栄日々におとろへ花やかなりしかたちも年々にすたれつゝ心をかけたるたぐひも疎くのみなりしかば家はやぶれて月のみむなしくすみ庭はあれて蓬のみいたづらにしげるまゝにかくまでおちぶれゆくほどに文屋康秀が參河の掾になりてくだりけるにさそひければ


巖屋大明神
山科大石古蹟
題大石氏故居
忠精聞天久
英風今尚存
月明清露耀
此夕似招魂
本社
荒神
弁天
山王
大石屋敷跡
西山村


醍醐花見
續門葉
櫻花さくいつかのむかしより
雲にあさ名れ立そめぬらん
義淳法師


小野随心院
中門
表門
玄関
小町化粧水

大宅
岩屋明神

わびぬれハ身をうき草の根をたえて誘ふ水あらハいなんとぞ思ふ　小野小町

とようて次第におちぶれゆくかとみえてふハ野山にさすらへ人々人間乃終

さま見るそ哀れし云

萱尾明神社　醍醐の東日野にあり土人権現神と云

例祭ハ九月九日にして法界寺の鎮守なり

腹帯地蔵　萱尾の西にあり本尊ハ行基の作長八尺

寺号を浄福寺といふ

太裡芝　日野村の良又町ばかりにあり日野家の別荘乃旧地之土人宮窟と云

口称して今大裡芝といふ

外山　日野村乃むかしの山をいふ此所に鴨長明方丈石あり

由緒前編に見えたり近年岩垣氏碑石を建ば

小栗栖の山上にあり土人奉幣社と云

天神宮　例祭ハ九月晦日之

巌屋明神社　山科大宅村の東にあり式内神宮道祖神西の山と同神也神祇式云

山科神社二座土人生土神と崇例祭九月十六日神輿二基

岩屋明神鳥居の巽二町にあり又初にかうところあへしゆく

興福寺旧蹟　山階寺とて

編年集成云大織冠鎌足公山階陶原館改てあらしふせら所ハ斉明天皇二年之

続日本紀云神護景雲二年山階寺ハ行幸しかへ天武帝白鳳元年己

階寺と大和国高市郡厩坂にうつを稱書云元明帝和銅三年淡海公真

旧の地にうつして興福寺と改む

興福寺橋　此所街道の中にある石橋之号古山階寺の門なり

佛足石　いふて此所にあり今西京薬師寺

[illegible]大和名所図会に見えたり

妙見寺　岩屋明神の南にあり妙見堂ありて小塚を築る拾芥抄曰妙見寺

の四方にあり今松さるる[illegible]此所東方の妙見寺なる

音羽山 顕注密勘云相坂関ハ山城と近江の境也音羽山ハ関より西南の山なれば関より西ハ山階なり。瀧。峯。里などに詠ぞ

石山にまうでゝ侍りける時音羽山のもみぢを見てよめる

古今 秋風の吹にし日より音羽山嶺乃梢も色つきにけり 貫之

夫木 ある神の音羽乃瀧やはさるらん関のあなたの名こそちれそ 中務親王

後撰 時津瀬に落そふ水れ音羽がはせくりてまさる五月雨乃ころ 為氏

同 秋ふかくなりゆくはに衣うつ音羽の里や夜さむなるらん 頼泰

名寄 郭公いつそきけるは音羽山ねりし里にやとりせは 藤原成房

牛尾山 音羽山ともいふ法厳寺といふ観音堂なり 由縁ハ縁に見へたり

堀川百首 嶺よりて牛の尾山にいる人を紫車みそてるあかりかな 修理大夫顕季

二井楽 牛の尾やまれくるまにふる瀧てはそれときゆる峯乃白雪

布引瀧 牛尾山にあり高三丈余幅三間計 岩上より布を引がごとし

蛇ケ渕 布引瀧より二十間計坂路の左にあり巌間に方四間餘の渕あり又四手井氏の家に霊方乃丸薬あり採金屑丸といふむかし此渕に大蛇棲て人民を悩まし年経たり時に四手井氏の先祖に保賀丸景繁といふ男士あり常に観音を信じ延久二年十二月七日糸の尻を渕を通りかゝるにおりしも悩をる氣色なく剣をぬきほどなく伐ほろぼし安く退治してかりけるにそれ治東清水寺の音羽瀧一日一夜血流ぐれ渡りてあるといへりかの大蛇の尻を

牛尾山法巌寺

此辺の芝生に焼捨たる今其所を焼芝といふ景綱は我家にかへりて終に蚫乃瘴氣にあたりて命も危ふくなんありける所に香染の衣を着たる異僧来りとして来りて稀なる薬の霊方を與へけり次郎調合しこれを服薬なしに速に平愈しけりぬ疑ひなく小牛尾観世音乃應験なりとて郷俗鍛冶治す治なりそれより四ッ井氏の家に代々秘薬として傳ふを後中篠年中松永弾正秀此霊薬の功能ためしみんとて極罪の者十人を出して大毒をあたへ内八人に此薬を服し其二人にはこれを用ゆかの八人の者は無事にし二人は即死をとげしより薬名かしこに挙の起家を擬らしめ丹様金創抱等に限りその薬觴今も厨子奥村四ッ井氏の支族に投代此人まで治世に弘むく

若宮八幡 若林村にあり此所の生土神なり例祭は九月日は半はにして祭りあり祠乃傍に古墳あり土人王塚といふ

白石明神社 小山村にあり東の山の下に一の白石あり其側に社あり是則白石明神也

白石菴 同所にあり東の祇樹一源統禅師行状云禅師諱は會統字は一源肥後の人也菊池藤氏に姓をとり戊寅の春に山に居して白石の神祠に隣る故に白石菴といふ

蓮如上人墳 山科本願寺舊記西に二水記云享禄五年八月廿四日山科本願寺寺中悉大衆合戦し早且已刻計に放火し悉く焼亡す本願寺は四五代に及んで今日一時に滅亡す 同年亭記

九月十六夜月おのしろくかくれは東山を見て

大宅や山科はなく小野山のあなりく庵の月は 蓮如上人

實如上人墳 同所東野村のあそにあり實如上人は本願寺九代にて蓮如上人の八男也光兼法印権大僧都大永五年二月二日遷化を

奉贈日本山科實如老上人
上人徳行是問何一箇禪門大丈夫心裏要容天外善此生渾似竹中虚
大明正徳八年五月　杭州鉄冠道人詹仲和

大明詹仲和といふ人竹の画を書實如上人を賞せる乃讃なり今西本願寺乃實藏にあり大明正徳八年ハ日本永正十年に當れり

青龍山白河寺

東野村にあり禪宗妙心寺に屬す本尊阿弥陀佛ハ慈覚の作泣像二尺餘後白河院の宸牌同帝の石塔あり當寺初ハ浄土宗なり旧山別時寺と号す中興梅天和尚

三之宮明神社

旧所にあり祭神三座 葺不合尊 左 稲荷 右 八幡 此所乃生土神とす

阿弥陀寺

三宮本地堂之本尊阿弥陀佛脇士毘沙門不動開祖ハ大僧都頼音坊寛永年中の建立之後水帝の勅願所之

花山稲荷社

南花山にあり世の人大石稲荷と称す遊戯再建あり

梅本寺

花山遊分の南にあり禪宗曹洞中興ハ加列金澤大乗寺四十一世祖和尚なり

本尊十一面観音 長二尺脇士ハ愛染不動也本尊を發揚の観音と号なる本ハ花山帝の愛妃弘徽殿の女御空しくなり世をはかなみ御悲歎浅からずあまりなり故に治世二年にて寛和二年六月廿二日聖壽十九歳にして帝位をおりさせ給ひ此花山寺に至て御髪を剃除し給ひ法諱を入覚と改め花山法皇と称し奉る其後熊野三所権現乃霊場を拝て畿内乃近國にて霊佛乃観世音卅三所を選ませたまひ又巡行し給ひ是西國巡礼の始之其時自身發佛と負せ給ふ本尊ハ玉體を縮めんとて當寺の始祖佛眼上人發揚の御衣に観音の像を画せ御肩にかけさせられしめくりまへ其發揚乃観音と換して當寺乃本尊とし故に發揚の観音とぞ号けるなり

むかし仁和寺の法師が石清水
参拝んとて極楽寺
高良などをおがみて
たゞそれのみへまいらず帰り
峠道山詣ずかへり
村里みてくわしく
ものとくべつそう
かうそ聞人それ
本意を遂しか
すこしのこともを
先達はあらまほ
きことなり
御法師も
数珠くりし
うかな

新草
句毫の
川原
極楽も
ありなほに
ぬかれし山路に
日はくれにけり

権僧正永縁

阿弥陀堂 小花谷にあり本尊阿弥陀仏ハ坐像四尺計傳へいふ東山阿弥陀ヶ峯に
阿弥陀堂の本尊なりといふ一説にハ重盛公燈籠堂本尊なりともいふ

元慶寺 同所阿弥陀堂東に一町計にあり初めハ天台宗近年禅宗と改む
妙巌和尚天明三年ニ本堂再建あり

本尊薬師仏 坐像七寸僧正遍昭の作とも 脇士 阿弥陀仏慈覚の作 毘沙門天運慶の作 僧正遍昭像 自作坐像一尺五六寸

花山法皇像 御自作共に脇士に安置す 当寺ハ陽成帝の御願にして貞観十一年に伽藍草創し紀元を配して元慶と号す いふ此地ハ街道の如く像に寺の内と呼ぶ字の地あり土人曰今に至て礎石土中より出るといふ

花山僧正 僧正遍昭俗姓ハ侍郎良岑安世が男にして宗貞と号す仁明帝乃近臣にして龍遇日々に昌なり嘉祥三年三月帝崩じ給ふ其哀慕にたへずして比叡山に登りて髪をおろし慈覚の室に入て台教を学ひ又勅ありて總持院におひて三部の灌頂を座主円珍より受元慶三年に僧正となる仁和帝遍昭が為に徳を重んじて封戸を賜ふ元慶乃座主となる寛平二年正月十九日入寂す 已上元亨釈書 花山法皇のこゝにありしとき給ふんとせし

拾遺 まてしいてしもつらし花にかへりとおもふ人のまもうふ 僧正遍昭

花山法皇 人皇六十五代の帝諱ハ師貞冷泉第一の皇子寛和二年当寺に入て薙髪し給ひ入覚法皇又花山院とも号す同年七月播州書写山に行幸ありまた寛弘五年二月八日崩じ給ふ寿齢四十一歳
著聞集云さても御門世をそむかせ給ふの御おこりハ法住寺相国の女弘徽殿の女御とそきこえし世中のかなしきことをおほしめしけるにや粟田関白いまだ蔵人少将にておはしけるが妻子珍宝及王位臨命終時不随者といふ文をおしへたてまつりて御心おこさせ給ひけるとそいひつたへたる 下略

遍昭墳 元慶寺の南二町ばかり民家の西田間にあり
塚のめぐりに樹木あり

其身さへをくさとしめん秋乃風 斑竹

東山寺 元慶寺の奥にあり禅宗本尊釈迦仏坐像二尺五寸開基大円宝鑑国師 拾芥抄云東山寺華頂と号す

神無森 追分の南半町計街道の右にあり 鵲坂 追分の東今平地にして坂なし
此地諸羽明神の御旅所なり
盛衰記云 会坂や一村杉の木の間より覚えの清水緑く之鵲坂神無の杜
醍醐路にかゝつて木幡の里を行ひて

蝉丸塔 此地蔵堂の後にありといへども土人の口称なり実記詳ならず

新古 秋風になびく浅茅のすゑごとにをく白露の哀れ世中 蝉丸

同 世中ハとてもかくても同しこと宮もわら屋もはてしなけれハ 全

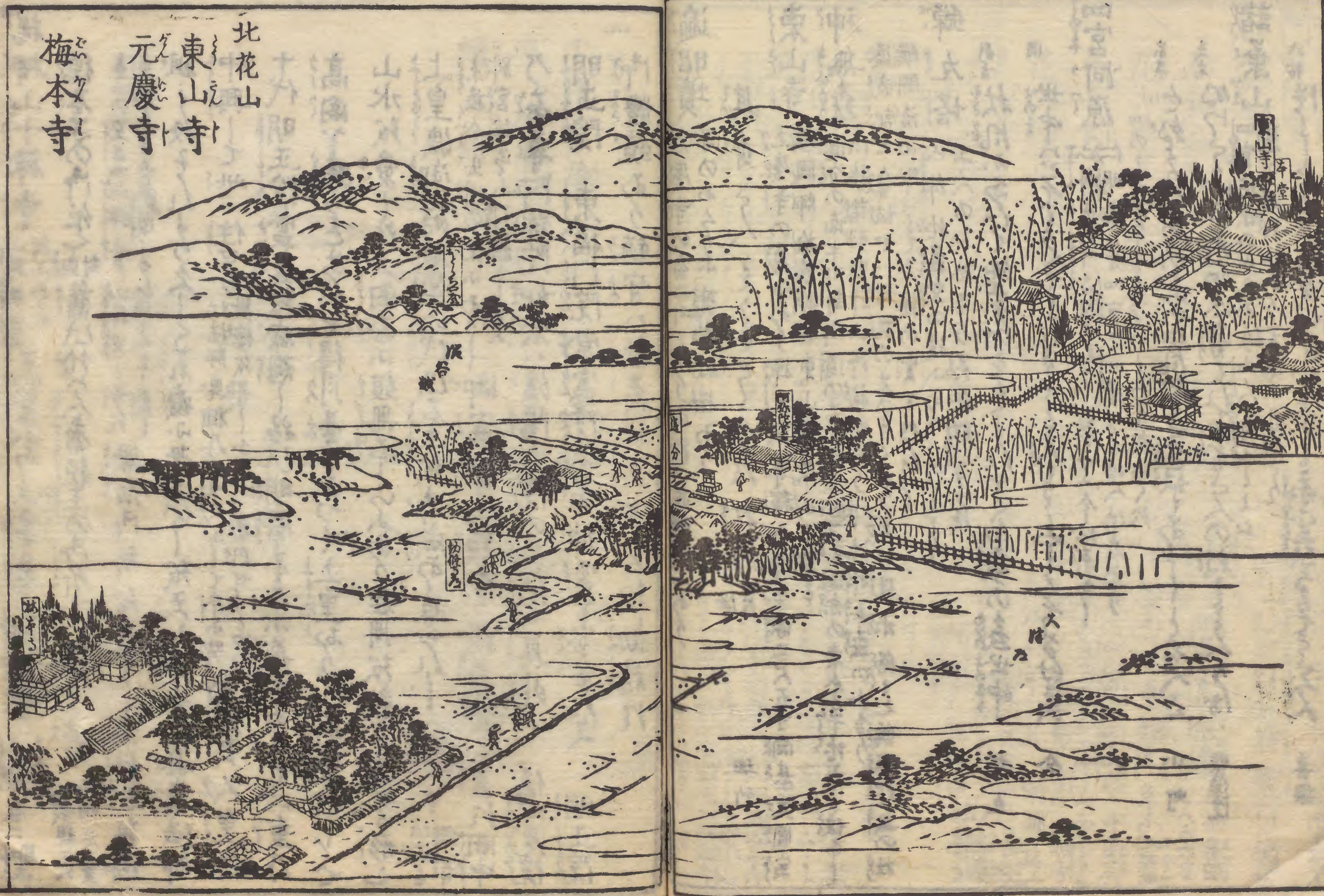
四宮河原 山科安祥寺村の西にあり 仁明帝第四宮の旧蹟なりゆへに此名あり
四のこゝろをもちひつゝりて風のうくに

家集 とゞめよりはるのこゝろの風やまた逢坂もありとおもへハ 小町

玉木 ぬけてくる四の宮河原に立つを見て人のねをとるなり 順徳院

諸羽山 四宮河原の北にあり諸羽社あり社の縁に土人柳山とよぶ

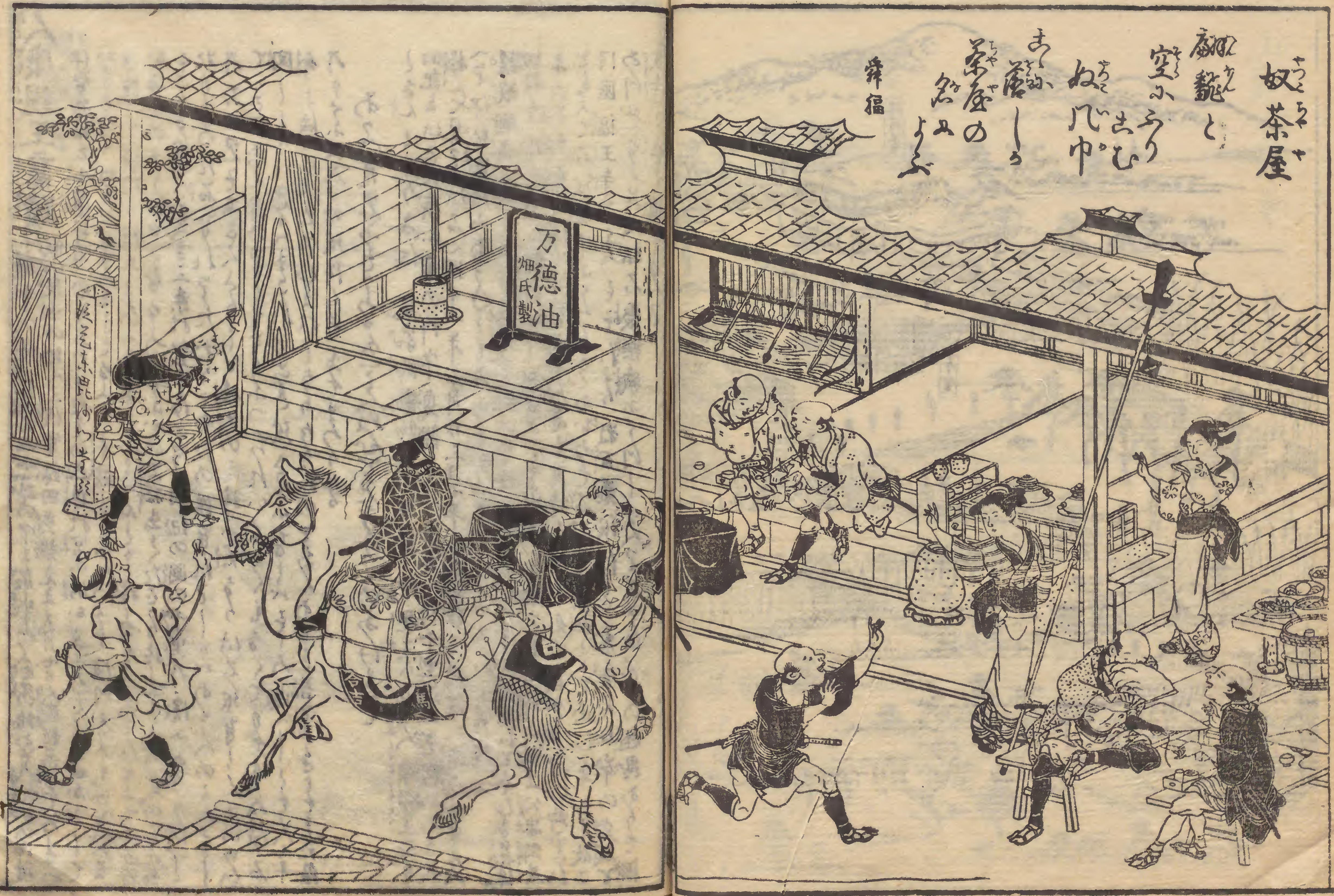
六帖 はるしとそのる葉れ山に四くらしも春山霞にすそをこそん 喜撰


北花山
東山寺
元慶寺
梅本寺
東山寺
本堂
阿弥陀堂
追分
大津

楊柳山十禅寺　山科郷四宮村にあり　天台宗にして本尊は聖観音之像長二尺八寸聖徳太子の御作也　勅封　旧此地は人康親王の御所也山階宮と称す　人康親王は仁明天皇第四の皇子四品弾正尹山科宮と号す貞観元年五月入道し給ひ同十四年薨る　厥后御所を寺とし此親王を開祖とし後それより久しく荒廃に及びしを天和年中に真慶法師中興して此に住せり　此法師は桐乃道人にして牛に騎襤褸を着しおのれ穀肉せしとぞ　堂舎は人皇百十代明正院霊夢を感想し給ひ明暦元年に再営ありて二重乃高閣を建らせ給ふこれを得月台となづく上皇ありく行幸ましまして山水を愛し給ふ閣の前に短冊石といふあり短冊を敷ならべたる形之上皇渡御の時鳳輦の代に此石上を御成あらせられしと也　へし御宸筆の額あり得月台と書す閣中　此閣を今の仕普　京極今出川の東にありし別宮を引移しまし乃本尊阿弥陀如来は後陽成院の勅作也其外　後水尾院　明正院　東福門院　常憲院殿等の神霊を安置なし又御体鏡あり鎮守は稲荷社天満宮を勧請す

四宮川
十禅寺橋
巡り地蔵
蝉丸塔

山科十禅寺
得月臺
方丈
本堂
短冊石
泉水石
十禅寺門前
三條通



奴茶屋
𢊁髭と空ふふり
きむねぢ巾
あて落しう
茶屋の名みよぶ
舜福
万徳油
畑氏製

人康親王舊蹟

十禪寺の傍石橋の西小松の中ニ泉水といふ字の地あり親王の御所の跡なり 假山泉水の址なり 三代實録曰貞觀元年五月七日人康親王出家入道

伊勢物語云 山階のせんじのみこおはします その山科の宮に瀧おとし水はしらせなどしておもしろくつくられたるにまうでたまうて 年ごろよそにはつかうまつれどちかくはいまだつかうまつらず こよひはここにさぶらはんと申したまふ 親王よろこびたまうてよるのおましのまうけせさせたまふ さるにかの大将いでてたばかりたまふやう 宮づかへのはじめにただなほやはあるべき 三条のおほみゆきせし時 紀の國の千里の濱にありけるいとおもしろき石たてまつれりき おほみゆきの後たてまつれりしかば ある人のみざうしのまへのみぞにすゑたりしを しまこのみたまふ君なり この石をたてまつらんとのたまひて みずいじんとねりしてとりにつかはす いくばくもなくてもてきぬ この石きゝしよりは見るはまされり これをただにたてまつらばすずろなるべしとて人々に歌よませたまふ 右の馬の頭なりける人のをなむ あをき苔をきざみて蒔絵のかたにこの歌をつけてたてまつりける

あかねども岩にぞかふる色見えぬ心を見せんよしのなければ

となむよめりける 定家卿勘物云 山科禪師親王ハ則人康親王なり

旧記云 此石ハ清和帝の御宇貞觀五年仲春紀州千里濱に光耀ありし人怪しんで見るに此石なり 同十八年三月廿三日に平安城に移し其後二條后愛しみ給へて伊勢物語にある所なり 其後後醍醐帝愛しみ給ひて時に藝州の守護人武田伊豆守氏信これを乞む其望切なりしかば遂に勅許ありて觀應二年に至て中納言公忠卿に賜ふ 公忠卿其年の冬勅勘を得て安藝國に左遷す 其時氏信年来の宿望を遂へかの御所に詣れを乞ふて此石を城中にうつさんとする時に石大いに鳴動して止まず 故に同國福王寺にうつし其後年経て秀吉公日本の名石をあつめ給ふ時に具此石聚樂城にうつし給ふに又さはがしく怪異ありしかば福王寺に返し遣しける

地藏寺

護國寺

業平谷ハ出雲安祥寺の北ニあり　今昔物語云右近中将在原業平といふ人ある人の娘ニ容顔艶ニして世ニ知らまさるありけるを心を盡して竊ニ盗出して負り具を負ひ隱るゝ所のなかりけれハ思ひ煩ひて北山科のあたりニ旧き山荘の荒て人も住ぬありける其家の内ニ大きなるあせ倉あり此内ニ娘と具して將行て女をバ置て俄ニ雷電霹靂して閧しけれバ中將太刀を拔て女をバ後の方ニ押遣て起居てひらめかしけるほどニ雷も漸く鳴止ぬ

奴茶店ハ大津街道髭谷越の別れ路の側ニあり
山家の家ニ住んで所岡田云傳といふ者あり勇猛の奴ニて射術の達人なりしか
慶長の頃ハ町計ニ閑居に其頃ハ諸国乃兵乱ニて街道も往来の人稀なり其
處ニ盗賊多くしこニ集りて旅人を討ちて衣類なども奪ひ取ける故ニ后
ありとぞのびとなる者此處ニ茶店を建て表ニハ兵器を掛て盗賊こりて
所ニ茶店を建て武器を掛て店ニ弓矢を携て家中の何某人と
を送りて其遺風今ニありて武器を掛店ニて所の家名相續人と
云傳ふ世流の射術を学ぶ人者も今ニ至りても其由緒を知る人ハ故

地藏寺ハ山科竹ケ鼻ニあり禪宗ニて開基ハ鐘山暁禪師中興ハ播州網
小野ノ龍門寺の盤珪和尚なり其弟子ハ佛智禪師
勝寶國師號佛智本尊地藏尊弘法大師の作立像なり左の脇檀ニ八足
利尊氏公の念持を安置す

護國寺ハ所西ニあり法華宗ニて開基ハ日勇上人なり祖師ハ
嚴有院の學校之

阿弥陀堂ハ所の北方ニあり本尊阿弥陀佛行基の作坐像八尺
所より二町ほど三昧あり其葬所の祖師堂ニて開基ハ行基之

国立公文書館
National Archives of Japan